

協働のかたち ① エンジニアとの協働

ひろば

連載：建築生産における協業を考える 第1回

覗いてみました他人の流儀

海外レポート

各支部活動報告 中国支部

未来へ継承したい風景

良質な建築、これからのまちづくり

オンラインセミナーの舞台裏

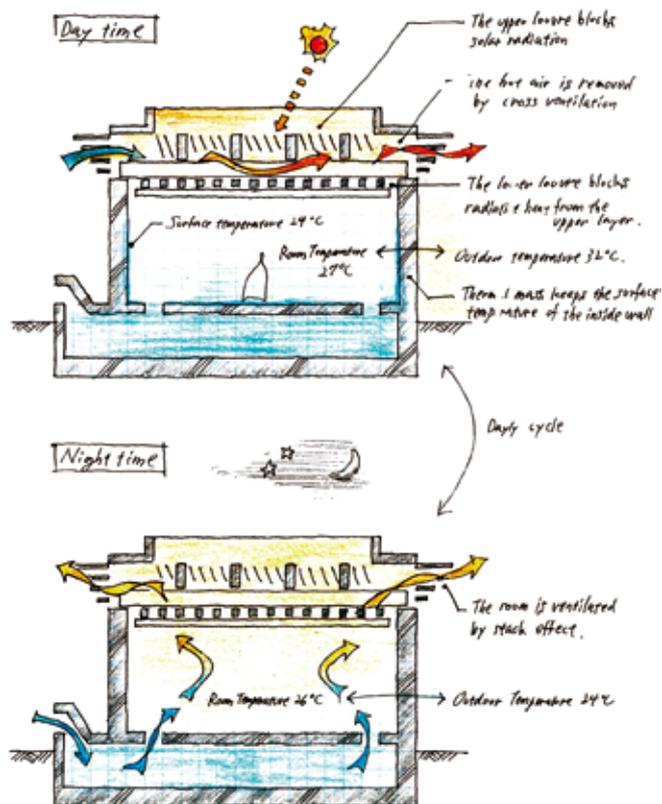
温故知新

活動報告

建築ウォームアップ

卒業設計をふりかえる

次世代のタマゴたち





すべてオーダーメイドで 用途に合わせた横引きシャッターを提供

株式会社横引シャッターは、横に引くシャッターを扱う専門メーカーです。今から35年前の1986(昭和61)年に、母体である株式会社中央シャッターで上吊式横引きシャッターを開発し、特殊シャッターだけを扱うメーカーとして設立されました。駅の売店やショッピングモールのテナントの防犯用シャッター、また、雨戸やガレージなど、さまざまなシーンで採用されています。

市川慎次郎社長に、会社の成り立ちや取り扱い製品についてうかがいました。

軽く開け閉めできる

上吊式の横引きシャッターを開発

当社は1970(昭和45)年に中央シャッターという、主にシャッターの修理を請け負う会社として創業しました。横に引くシャッターは当時他社で作られていましたが、下に戸車の付いた下車式なので、レールに埃やゴミが溜まると動かしづらくなり、故障も多いという課題がありました。そこで、私の父である先代社長が、故障が少なく軽く開け閉めできる上吊式の横引きシャッターを開発。特許を取得して、1986(昭和61)年に別会社の横引シャッター社を設立しました。

開発当時はなかなか採用してもらえませんでした。上下シャッターは上部にシャッター収納ボックスが必要なに対し、横引きシャッターは横に収納ボックスを取り付けるため、天井の懐を最小限にすることができることから、1990年代後半からショッピングモールなど商業施設のテナントに多く採用してもらえるようになりました。

今では、駅の売店などで使われている典型的な横引きシャッターや中が見えるフォールディングゲート、水平引きシャッターなどラインナップも増え、住宅の雨戸やガレージなどさまざまな場所に採用されています。

広い間口や

曲線上にも取り付け可能

横引きシャッターのメリットのひとつは、お年寄りの方でも簡単に開け閉



ユザワヤ蒲田店様 横引きシャッター



駅構内キオスク 横引きシャッター



神奈川某邸 横引きシャッター



勝浦市某邸 横引きシャッター



千葉市某邸 フォールディングゲート



足立区某邸 横引きシャッター

めできることです。電動スイッチ付きはもちろん、手動でも軽く引くだけであとは自動で進んでいくため、大きな負荷なく開閉できます。また、間口が広い場合、上下シャッターは中柱を立てて複数のシャッターをつないで設置しますが、横引きシャッターなら間口が50m以上あっても1枚のシャッターで対応可能。建物の外観に合わせて、S字などの曲線上に取り付けることもできます。

材質には高品質なアルミを使用しており、特殊な色に塗装したり、アルミ本体に天然木を貼り付け、日本家屋の美観に合わせることもできます。他にもシャッターの厚みを通常2倍にして強度を強化した防犯型特殊シャッターや、ステンレス製/スチール製の防火防煙シャッターも取り揃えています。

ひとつひとつ丁寧に

気持ちのこもったシャッターを

当社が取り扱うシャッターはすべてオーダーメイドで、既存の建物に後付けすることも可能です。お客様の要望に応じて、用途にふさわしいサイズや形状のシャッターをご提案しています。また、シャッターの収納方法や収納ボックスの大きさも、これまでの経験やノウハウをもとに設置場所の条件に合わせて設計し、最適なものを提供しています。

現在、横引きシャッターではトップシェアをいただいておりますが、会社を大きくするというより、中小企業だからこそできることを大切に、私自身率先して1件1件丁寧に対応し、気持ちのこもったシャッターを作りたいと思っています。



株式会社 横引シャッター

<https://www.yokobiki-shutter.co.jp>

横引きシャッター、パイプカーテンゲート、フォールディングゲート、パイプシャッターなど、特殊シャッターを製造・販売。メンテナンスも行う。

本社 東京都足立区綾瀬6-31-5 TEL: 03-3628-4500(代) FAX: 03-3628-1188

工場 綾瀬工場(東京都足立区綾瀬)、三郷工場(埼玉県三郷市)、坩工場(埼玉県八潮市)

目次

● 特集

4 協働のかたち ❶

エンジニアとの協働

インタビュー：Arupに訊く 建築家とのフラットな協働とは

参加者	与那嶺仁志	Arup／構造エンジニア
	菅 健太郎	Arup／環境設備エンジニア
	繁永幸治	Arup／ファサードエンジニア
聞き手	関本竜太	『Bulletin』編集長／リオタデザイン 『Bulletin』WGメンバー

● ひろば

- 12 連載：建築生産における協業を考える 第1回
「協業」を考えることは「分業」を考えること 小笠原正豊建築設計事務所／東京電機大学 小笠原正豊
- 14 interview：覗いてみました他人の流儀
吉川二郎氏に聞く ギターで描くスペインの情景 Bulletin編集WG
- 16 海外レポート ブータンの伝統的な集落と民家 名城大学 吉村晶子
- 18 各支部活動報告
JIA 中国支部建築家大会 in 米子2020
- 菊竹清訓 ホテル東光園 誕生の舞台裏—遠藤勝勸氏に聞く クルマナオキ建築設計事務所 来間直樹
- 20 未来へ継承したい風景
新宿の生きている風景 一瞥みや文化を感じる都市公園と街並一 アーキヴィジョン広谷スタジオ 広谷純弘
- 22 良質な建築、これからのまちづくり
「今」は歴史の最中 一歴史を繋ぐというまちづくり一 伊藤純一アトリエ 伊藤純一
- 23 オンラインセミナーの舞台裏
失敗から知り得た「ZOOMオンラインオフライン同時配信」虎の巻 フィールド・デザイン・アーキテクト 井上雅宏
- 24 温故知新 建築家によるアーバンデザインへの気づき アルキメディア設計研究所／明治大学 小林正美
- 25 抱負を語る 建築は人生 エヌスケッチ 井口哲一
- 抱負を語る 意匠と設備 堀池瞬建築事務所 堀池 瞬
- 26 活動報告 交流委員会 2021年JIA 交流委員会活動方針 一設計者に向けたオンライン技術セミナーを開催一 蒼設備設計 相野谷誠志
- 28 建築ウォームアップ 一建築のはじまりかたを探る一 カンを集めて臨機応変に 榎本建築設計事務所 榎本雅夫
- 29 卒業設計をふりかえる 「建築の両義性」への眼差し リライト_D／日本大学理工学部 古澤大輔
- 30 次世代のタマゴたち
連載スタートにあたって 日本大学理工学部建築学科 長谷川理奈
コロナ禍での卒制を経て 千葉大学大学院 植木 萌

● あとがき

- 31 広報からのお知らせ 『Bulletin』編集長退任挨拶／新任挨拶
- 31 編集後記
- 2 パートナーズアイ 株式会社横引シャッター すべてオーダーメイドで用途に合わせた横引きシャッターを提供

表紙画像：「無量光 明圓寺納骨堂清浄殿」（設計：古森弘一建築設計事務所）環境計画のスケッチ 提供 Arup

公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前2-3-18 JIA館

Tel：03-3408-8291(代) Fax：03-3408-8294

https://www.jia-kanto.org/



2021年度テーマ

協働のかたち ①

エンジニアとの協働

建築は「協働」の時代へ

建築は数多くの人々が関わることで始めて出来上がります。これまでも建築家は計画の統括者として、ビルダーやエンジニアをはじめとした数多くの関係者と協力関係を結ぶことで、建築に関わるあらゆる要素をまとめてきました。

ところが一方で、昨今の建築を取り巻く状況はより高度かつ複雑に多様化してきています。クライアントの要望や社会的要請に十分な結果で応えるためには、もはや建築家を頂点とする図式ではなく、ヒエラルキーを持たず、フラットにつながるプロフェッショナルたちとの協働が今や強く求められているのではないのでしょうか。

建築におけるコラボレーターとの協働のかたちはさまざまです。2021年度の『Bulletin』は、建築家とその仕事を支えるプロフェッショナルたちとのさまざまな「協働のかたち」を年間テーマに据え、ものづくりにおけるお互いの仕事を支え合い、高め合う関係性について掘り下げてみたいと思います。

また今年度の「協働」というテーマは、それぞれ他者との関わりや、相互の化学反応によって生まれるものにスポットを当てようとするものです。そのため、その構成はモノログとしての原稿の執筆形式ではなく、ダイアログ(対話)としての対談形式を取り入れた構成とします。また対談も、単独ではなく、毎回複数の関連し合う人たちに登場いただき、その場で起こる発言者間の化学反応や、発展的な議論を含めてすくい上げ、ライブ感をもって誌面に紹介していきます。

夏号：協働のかたち ① | 「エンジニア」との協働

意匠を統括する建築家の仕事を技術面からサポートするエンジニアは、創造的かつ合理的な建築計画には欠かせない存在といえるでしょう。本夏号ではこのエンジニアとの協働を取り上げます。

エンジニアと一括りにしても、そこにはさまざまなフィールドが存在します。夏号では、グローバルな建築エンジニア集団 Arup に籍を置く各フィールドのトップ

エンジニアたちに登場していただき、それぞれの仕事の考え方や建築家との協働にあたって心がけていること、建築家に望むことなどをお聞きしながら、エンジニアと協働して建築をつくる意味や意義、そして課題はどこにあるのかを探りたいと思います。

以下は、次号以降に予定しているテーマです。

秋号：協働のかたち ② | 「ビルダー」との協働(予定)

我々がいくら図面を描こうとも、現場(ビルダー)の手なくしては建築はつくれません。

現場を統括するゼネコンや工務店の現場監督や、実際に汗を流してものづくりに携わる職人たちは何をモチベーションとして仕事に向き合い、そして我々設計者との距離感をどのように考えているのでしょうか？ そんなビルダーたちの本音に迫りたいと思います。

冬号：協働のかたち ③ | 「メーカー」との協働(予定)

技術的にも高度な建築を短工期で合理的につくり上げるためには、工業製品をつくりあげるメーカーとの協働も我々には欠かせないものです。建築家のニッチな要望に応え、個別解をクリエイティブな普遍解として製品化するメーカーのメリットはどこにあるのか、またその社会的使命をメーカーはどのように捉えているのか。そんな視点で切り込んでみたいと思います。

春号：協働のかたち ④ | 「デザイナー」との協働(予定)

かつて建築家が建築に関わるすべてのデザインを行っていた時代から、今や建築家は多岐にわたるデザインフィールドのスペシャリストたちと協働することで、建築全体のデザインをより高め、コントロールする立場へと変わってきました。ここでは建築家とデザイナーとの創造的コラボレーションに焦点を当て、新しい建築の価値を生み出すためのヒントを探りたいと思います。

(『Bulletin』編集長 関本竜太)

Arupに訊く 建築家とのフラットな協働とは

参加者	与那嶺仁志 すが 菅 健太郎	Arup／構造エンジニア Arup／環境設備エンジニア
	繁永幸治	Arup／ファサードエンジニア
聞き手	関本竜太	『Bulletin』編集長／リオタデザイン 『Bulletin』WGメンバー



上段左から 与那嶺仁志さん、菅 健太郎さん
下段左から 繁永幸治さん、関本竜太編集長

2021年度特集「協働のかたち」第1回目は、「エンジニアとの協働」をテーマに、グローバルなエンジニアリング・コンサルティング企業のArupから与那嶺仁志さん（構造）、菅 健太郎さん（環境設備）、繁永幸治さん（ファサード）に参加いただき、Zoomでインタビューを行いました。建築家との協働もありますが、エンジニア同士の連携についてもお話しいただきました。

それぞれの職能を生かして建築をつくる

関本 まずはそれぞれどんな仕事をされているのかお話しただけですか。

与那嶺 構造 私は構造エンジニアです。技術者として、日本であれば地震や台風など地域の特性に合わせて安全な建物をつくるのが職能の根底にあります。我々Arupは、創造的なデザインや、社会に貢献できるものは何かという視点を大切にしています。それを私は構造という立場から、建築にどう貢献できるかを考えながら設計しています。技術者ではありますが、どのプロジェクトも一人の設計者として参加することを心掛けています。

菅 環境設備 私は環境設備のエンジニアです。設備というと、電気や機械を使って環境を調整するアクティブシステム（付帯設備）をイメージする方が多いと思います。しかし、建築空間はそこに作り出す環境もとても重要なので、Arupでは設備に「環境」という言葉を付けて「環境設備」という言い方をして、アクティブシステムだけでなく、パッシブなシステムも含めて設計しています。与那嶺と同じで、建築をトータルで考えていく中で、パッシブシステムとアクティブシステムを用いて、人間のための環境を調整するのが環境設備エンジニアの職能です。設備設計は手段のひとつと捉えていて、目的は建築をつくることです。

関本 繁永さんのファサードエンジニアリングはあまり知られていない職能だと思いますが、どのようなお仕事をされているのでしょうか。

繁永 ファサード 一般的にファサードエンジニアリングというと外装設計というような意味合いになるので、カーテンウォールの仕様書や詳細図を作成するのがそれに当たりますが、日本では一般的なファサードは建築家がメーカーに直接相談して設計を進めることが多いので、そこに我々が入ることは正直あまりありません。海外ではメーカーが日本のような建築家との協力関係にないので、海外のファサードエンジニアは実施設計図やカーテンウォールの施工図を描くことも多いです。

日本では、外装設計でメーカーが協力するのが難しい特殊なプロジェクトの場合に我々が入ることがあります。近年形状が複雑な建物が多くなっているのですが、そういった建物に対して、何の材料を使うのか、どういった工法で外装を支持するのかなど、少し構造設計にも絡むのですが、そういった部分を含めて外装設計の協力をしたりします。それから最近は、光や風、温熱など周辺環境を考慮しながら建物の形状を考えたり、仕様はどういったものがいいのかをシミュレーションを交えながら建築家と一緒に考えていくことが多いですね。

関本 皆さん建築家から声が掛かってプロジェクトに参加するのだと思いますが、設計のどのような段階で入ることが多いのですか。

与那嶺 構造 プロジェクトによって加わるタイミングはさまざまですが、我々はできるだけ設計の初期の段階で声を掛けていただきたいと思います。いろいろな可能性が狭くなりすぎた時に入ることほど不幸なことはありませんので。それは構造だけでなく他の分野も同じだと思います。ですから、いつも気軽に声を掛けてくださいと建築家の皆さんには言うようにしています。



「道の駅ましこ」(設計:MOUNT FUJI ARCHITECTS STUDIO) ©道の駅ましこ



山型の木架構で柱のない大空間をつくる



コンクリートの土台に木架構を載せる ©MOUNT FUJI ARCHITECTS STUDIO

菅 環境設備 建築家の考えに対して、我々が違う視点で問題を解くことで最終的に面白いものができあがると思っています。ですから、できるだけ早い段階で建築家の考えを共有していただきたいですし、どちらかというとな茶な要求のほうがやりがいがあります。

繁永 ファサード こんな無理だろうと思うような案や要求を出されると燃えますね。

ARCHITECTS STUDIOの原田さんご夫妻は、エンジニアリングが大好きなので、構造の大きな方針が最初にあって、それを一緒に発展させるような進め方もあります。物件ごとにさまざまですね。

社内では、若手スタッフもどんどん提案しますし、自分たちがいいと思うものを発言する人が多いです。そういうアクティブな状況をつくって何かをやるということが重要だと思います。

菅 環境設備 私も同じで、1人で考えるのを極力避けて、できるだけ打ち合わせをさせてもらうようにしています。自分の思考力が固まってしまうないように、いろいろ刺激してもらうためにも、建築家の方や社内と同僚と会話をして、それをきっかけにさらに考えるように意識しています。そうすると、ひとつの方向に凝り固まらずにいいアイデアが出てくるように思います。打ち合わせではわざと質問してみたり、「こういう場合はどうなのでしょう？」などと尋ねることで、その回答を受けるとまた別の視点が出てくる、その繰り返しです。絵を描くのは私も大事だと思っていて、絵がうまくなくてもとりあえず考えていることを描いて出すと、それをきっかけにまた議論が弾みます。

社内では、私が構造設計者に「もっと合理的にできるんじゃないの？」と意見することもありますし、構造設計者が「設備のスペース取りすぎじゃない？」などと言うこともあって、お互いの領域に踏み込んで議論していて、それがとても大事だと感じています。ですから建築家に対しても同じスタンスで臨んでいるつもりです。Arupに声を掛けてくださる方は、そういうことを期待していると思っていますし、我々もそういう関係で仕事ができる方たちと一緒にやらせていただけると、いちばん力を発揮できると思っています。

繁永 ファサード やはり内部にも外部にも会話を重ねることですね。何かしら糸口をつかむために事例を用意したり、マテリアルを用意したりして、イメージを膨らませるようにしています。

それから、合理性はとくに意識しています。超高層ビルなどではカーテンウォールで同じものが連続する場合が多いので、やはりそこを合理的につくるのはとても重

建築家と、とことん議論する

関本 計画の初期において、建築家とどのように話を進めていくのでしょうか。

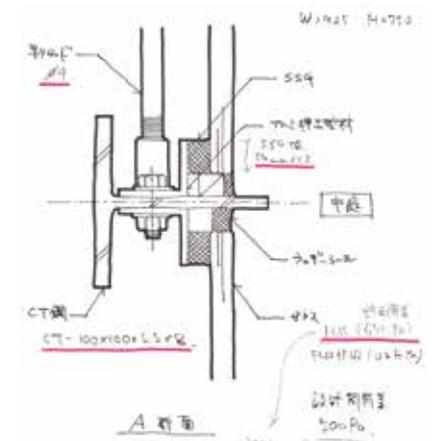
与那嶺 構造 我々はいろいろな建築家と仕事をするので、人や物件によってアプローチも異なりますが、同じなのはまず設計意図をきちんと把握するという事です。なぜこの建物をつくるのか、なぜこの形なのかなど、方向性やビジョンを共有します。それがわかれば、構造の解につながる話にスムーズに発展します。ほかにも設計する上での優先順位を確認したりと、とにかく話をします。

建築家が何をしたいのかが理解できていないと、我々が提案する時に何をしたらいいのかわかりませんし、提案したとしても相手に響きません。

関本 建築家からの提案を受けてそれを形にしていく、解決に持ち込んでいく時、一般的にエンジニアはどんなことを考えているのでしょうか。

与那嶺 構造 私は議論をします。いかに話が膨らむようなきっかけをつくるかを意識しています。物件によっては、議論するためのダメ案もつくったりもします。議論の場では、何が設計者の考えに近いのか確認したり、方向性が決まっていない時には一緒に考えやすいように、いろいろスケッチを描いたりするようにしています。考えるきっかけとなるようなことをいろいろ織り交ぜていくプロセスを大切にしています。

2017年にJIA日本建築大賞を受賞した「道の駅ましこ」の構造設計を担当したのですが、MOUNT FUJI



「SHOCHIKUCHO HOUSE」(設計：西沢立衛建築設計事務所) 建物を覆う木製ルーバー

中庭に面したガラスカーテンウォール

要なことです。またメーカー1社にしか相談していない場合、コストコントロールしにくいところを、我々が第三者的な立場で外装システムの提案を行い、その提案をもとに各メーカーから見積りを取り、コストコントロールをすることもあります。そういったコンサルのような依頼を受けることもあります。

関本 とくにファサードは、費用の内訳は一式になっていてわかりにくいことがあります。どうしてそのファサードにしたいのか、どこが重要なのかなど、設計意図を理解していると落としどころが明確になり、結果的にコストコントロールにつながっていくということもありますね。

繁永 **ファサード** はい。各メーカーが自社の製品を推してくるのは当然ですが、それがその建物にとって適切なものかどうかは、やはりメーカーとだけ話していたのではわかりません。そういった意味でも、我々のようなエンジニアと一緒に考えることによって、いろいろな工法や材料を提案しながら、やりたいことを実現していくのもひとつの方法だと思います。

与那嶺 **構造** 予算の中で工費の強弱をうまくつけて実現するといったコストコントロールは、我々はかなり意識してやっています。限られた予算の中で何ができるかを、建築家と一緒にデザインしている感じですね。

エンジニア同士の連携

関本 『新建築 住宅特集』(2021年3月号)に掲載された「SHOCHIKUCHO HOUSE」(設計：西沢立衛建築設計事務所)を例にうかがいます。こちらは菅さんと繁永さんが設計に参加されています。この住宅は建物全体を覆うルーバーのファサードが象徴的ですが、住宅を木製ルーバーで包み込みたいという具体的な話が建築家側からあったのでしょうか。

繁永 **ファサード** 当初からルーバーで建物の周りを囲むデ

ガラスカーテンウォールの詳細検討段階におけるスケッチ

ザインは建築家から提案されていました。最初につくりたいものを模型で示してもらい、それに対して模型通りにつくることができるのか検証するところから始めました。ルーバーはなるべく細く、支持材等も見えないデザインを実現させたいということだったので、どういうディテールがふさわしいのかを一緒に考えました。

また、ルーバーは天然木で、サッシや木壁など、いろいろなところに取り付いているので、それぞれに対してどのような取り付け方法がいいのかを検討しました。同時に、どういった部材断面が必要なのかや、ビスサイズやピッチなども検討しました。

関本 ルーバーのピッチや見付は、建築家側から意匠提案を受けて考えていったのですか。

繁永 **ファサード** まずはこうしたいというアイデアをいただいて、それに基づいて、強度的に大丈夫か、また留めるピッチがそれだとこのようになりますというものをお出ししました。木の場合は強度的に問題がなくても、鉄やアルミと違い経年に変形したり伸縮します。ですから、構造的にもっているから大丈夫と言ってしまうのは危険だと思っていて、そこは計算では出しにくいのですが、十分に検証するようにしています。

関本 サッシの支持鉄骨の検討にも繁永さんが協力されたということですが、ファサードエンジニアと構造エンジニアのすみ分けはあるのでしょうか。

与那嶺 **構造** ちょうど境目ですね。ファサードチームのメンバーには、構造計算をする人もいますし、材料に特化した人、環境的なことを考える人など、いろいろな人が集まってグループをつくっています。ですから、サッシまわりの架構をファサードエンジニア側で設計することもありますし、構造エンジニアが設計することもあります。



「MISS HIROSHIMA (Tamaya BLD)」
(設計：FUTURE STUDIO)
構造はフラットバー(鉄のプレート)を使いダイヤモンド形状で構成し、そこにガラス外装をミニマムにデザイン。構造エンジニアとファサードエンジニアの協働。
右はモックアップ。



「無量光 明圓寺納骨堂清浄殿」(設計：古森弘一建築設計事務所)

アルミの押し出し部材など、ファサードの細かい納まりはファサードチームが専門なので、そういう部分は繁永たちに細かく見てもらいます。

管 環境設備 環境設備からは、ファサードの詳細を決めていくプロセスで、日射を遮ることができているかや、ガラスの性能の検討など、やはり繁永と一緒に確認しながら進めました。

与那嶺 構造 例えば構造体がファサードと一体になるような特殊な建物では、市販のシステムでは対応できない時があります。そういう場合はファサードエンジニアに相談すると、デザイン的にも優れていて、かつシンプルでコストダウンにもなるような案を一緒に考えてくれるので面白いです。

中澤(「Bulletin」WG) ファサードエンジニアはディテールを扱うということですが、ディテールは現場で思うようにならないことがいちばん起きやすいと思います。そのような時、現場ではどのように対応するのでしょか。

繁永 ファサード おっしゃるように、設計していたものから現場に入ると変わることはよくあります。その中でもここは守りたいとか、建築家としてここは見せたいというところをきちんと明確にすることが大事だと思います。守らなくてはいけない寸法は必ず守るように、現場に入ってもメーカーの施工図等を見てチェックするようにしています。

自然の原理で建築環境をつくる

関本 菅さんが環境設備を担当された、福岡県飯塚市の「無量光 明圓寺納骨堂清浄殿」(設計：古森弘一建築設計事務所)のプロジェクトについてもお聞きします。これは屋根全面にトップライトを採用していて、照明を使っていません。納骨堂は夜に人が来ることはないから照明設備はいらない。しかもお盆の時期しか人は来ないから、暑さだけ解消できれば大げさな設備はいらないということか

ら、トップライトのみからの採光にされたそうですね。しかし、そうするとお盆の時期は室内は灼熱になってしまいそうですが、そのままのアイデアで実現させています。どういう仕組みで成立させたのか教えていただけますか。

管 環境設備 最初に設計者から電気を使いたくないという話がありました。ですから室内を明るくするためにトップライトもしくはハイサイドライトから光を採り入れないといけないのですが、それだけでは関本さんがおっしゃるように夏場の室内温度は40度を超えてしまいます。そこで最初に考えたのは、屋根にソーラーチムニーのようなものを立てて、それで風を起こして室内に涼しい風を取り込む案でした。それでスタディを進めたのですが、それでも夏は外気が入ってくるとやはり暑いので、蓄熱効果を生かすような、例えば教会に入った時になんとなく涼しく感じる、あれをうまく再現できないかと考えました。

一方で、トップライトから光を採り入れると熱も同時に入ってきてしまうので、それを止めないといけません。いちばんいいのは外ルーバーを取り付けることだったのですが、100年建築を目指したいという施主の意向があり、メンテナンスの観点からそれは諦めました。

最終的には、天井の中に懐を取り、その中の梁を木の格子状のルーバーにすることで日射を止めて、外からの熱が室内の下の方までいかないようにしました。上で止めた熱は、自然に外に逃げていけば下の方は鍋底にたまった空気のように、冷たい空気を動かなくできるのではないかと考えたのです。さらに、コンクリートの壁厚を400mmにして十分な蓄熱効果をもたせることで、日中でも外気温より低い環境になり、最終的にうまくいきました。

関本 室内側の涼しい空気を室内の底に留めるということですね。スケッチを見ると床下から空気が出ていますが、これについても教えていただけますか。

管 環境設備 これは昼と夜でモードが変わることを想定しています。昼は外の方が室内よりも気温が高いので、煙突効果は起きず室内の空気は上に動きません。夜になる



「無量光」 内部に電気設備はなく、明かりはトップライト下で日射を遮る梁とルーバー

と外気が室内の温度よりも低くなるので、煙突効果で空気は上に抜けていく流れが生じる。それをピットから床を通して室内に入れてあげること、換気もできるしピットの蓄熱も生かして夜間の室温もさらに涼しくできると考えました。そのようなことで、機械空調も照明設備も入っていません。環境設備として図面は何も納めていないので、成果物がなかったプロジェクトです(笑)。

関本 設備のいらない建築ができたけれど、それを実現させたのは環境設備エンジニアだったというのが、鳥肌が立つ非常に痛快なプロジェクトですね。自然の原理だけを使って建築環境をつくっていて、それが非常にサステナブルだと思いました。また蓄熱で解いているのも面白いです。

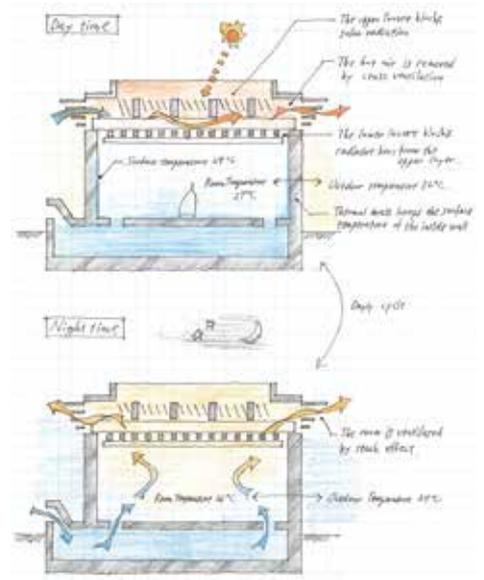
菅 環境設備 壁厚を400mmにするのは、私から構造設計者をお願いしました。断熱の話もありましたが、建築としてのプリミティブな環境装置であることを重視して、なしになりました。それに、外断熱にしてしまうと冬は温める要素が一切なくなってしまいます。そういう点からも、断熱はなくてよかったと個人的には思っています。

関本 過去の記事において、菅さんは設備のことを「どれだけ目立たせずに溶け込ませることができるか」と発言されています。ご自身の仕事において、そのようなことを目指しているのでしょうか。

菅 環境設備 設備設計者として空調などを設計していると、やはり建築ではないエレメントを建物に突っ込んでいような感覚がたまにあります。そうではなくて、もう少し建築と一体となったものにならないかなという思いはずっとありますね。ですから、設備が工夫されてうまく建築に溶け込んでいるようなものを見ると嬉しくなります。解決方法は前に出すものでもないと思っていますし、やはり建築として環境をつくり出すのがいちばん理想です。

関本 繁永さんが街を歩いている、このファサードの解決方法はいいなと思うことはあるのでしょうか。

繁永 ファサード ありますね。すごくすっきりした納まりのファサードを見ると、どうなっているのだろうと、つ



設備断面図のスケッチ
昼夜の風の動きの違いを示したもの

いついディテールを見てしまいます。そういうものを見ると、自分のプロジェクトにも反映してみたいくなります。

関本 ご自身の仕事の領域とは関係なく、これはいい建築だと思うものはありますか。

与那嶺 構造 いろいろありますが、見に行つて感動したのはキンベル美術館です。美術館としてももちろん素晴らしいのですが、構造的にもプレストレスを入れた繊細なロングスパンの屋根がとても綺麗で、それとトップライトからの光や設備の配置など全てがトータルにデザインされ展示品と一体になっています。基本的には人が集まって、建物として生き生きしているものが好きですね。

菅 環境設備 たくさんありすぎて答えるのが難しいですが、自分が建築学科在学中にエンジニアの道に進もうと思ったきっかけは、シドニーのオペラハウスなんです。設備ではなく構造的な話なのですが、設計者のスケッチを実現させるために、屋根の形を少しずつ変えていき、最終的にシェルをすべて同一の曲率の球面に合わせることで解決したという話を知り、それでエンジニアになろうと思いました。実際に学生の頃に見に行きましたが、とても感動しました。

繁永 ファサード 私は具体的な建物というより設計の仕方なのですが、外装を考える時、皆さん部材はなるべく細く、ガラスだったらなるべく大きいサイズと言いますが、それに対して外装の部材サイズや割付をすべてモジュールで考えて、極端に細くとか太くとか大きくという話ではなく、全体のバランスを考えながら部材の寸法などを決めている設計手法をしている建築に興味を惹かれます。日頃仕事ではディテールばかり細かく見てしまうのですが、建築全体としての外装のあり方を考えて設計するそのやり方に改めて感心し、そういう建築はいいなと思います。

フラットな関係が化学反応を生む

関本 菅さんに事前にいただいた資料の中に、「誰かを中心とした放射状の関係性のあるチームは弱くて、もっと有機的にそれぞれのメンバーがネットワーク状に関係しているチームが強いのではないか」というようなご発言がありました。これは今回の「エンジニアとの協働」において重要な言葉になるのではないかと思います。これはまさにArupのことを言っているのでしょうか。

菅 環境設備 はい。自分は今、環境設備チームのリーダーという立場にいますが、私が考えた通りにチームのみんながただ動くのでは設計もチームとしても破綻してしまいます。人によって得意な分野が違いますし、むしろ私ができないことをできる人がいっぱいいて、そういった中でみんなが有機的に動き出すと、ものすごく強いチームになると考えています。

建築家との協働においても、得意なところを生かして補い合うのが理想で、そこにヒエラルキーはないと思っています。もちろんある程度オーダー（序列）は必要ですが、意見を言う時にはフラットになれるといちばん面白い化学反応が起こるのではないのでしょうか。

会田（「Bulletin」WG） アメリカでは、施主が設計者だけでなくエンジニアやファサードコンサルタントなどさまざまな専門家に直接発注し、まさにフラットな関係で設計します。そして、プロジェクトマネージャー（PM）など施主側の代表者がいるというスタイルです。そういうあり方が日本で普及する可能性はあるのでしょうか。また、そのスタイルのメリット・デメリットや、発注の仕方についてご意見をうかがえますか。

菅 環境設備 プロジェクトマネジメントというものが受け入れられている素地があるかどうかで、だいぶ違うのではないのでしょうか。今の日本では、建築家の役割はプロジェクトマネジメントを兼ねていますよね。ですから建築家の皆さんはすごくマネジメント能力を持っていて、施主は建築家に発注すればすべて取りまとめてくれるというマーケットになっています。逆に、日本でプロジェクトマネージャーが入るプロジェクトは、混乱が起きやすかったりもします。やはりそのあたりがもう少し成熟しないと、日本で海外のようなスタイルの普及はなかなか難しい気がします。

海外のプロジェクトに参加すると、そのあたりの風通

しがすごくいいです。建築家もエンジニアもみんなフラットな立場で、現場でもゼネコンもサブコンもフラットな立場でやっています。

日本のようにヒエラルキーをつくって秩序立てるのか、それとももう少し受け入れられる素地をつくった上でフラットな体制にするのか、どちらも良いところと悪いところがあると思って見えています。なかなか日本では後者の例はありませんが、Arupでも場合によってはこちらから建築家に声をかけて、通常とは逆の関係で仕事をすることもあります。

与那嶺 構造 施主側にPMがいるケースだったり、施主がPMを雇うケースもありますし、設計チーム側にも窓口となるPMがいるなど、海外ではマネジメントの考え方が日本と大きく違いますよね。それはおそらく日本では一括で発注する文化が根付いているからではないでしょうか。どちらも良いところ悪いところがそれぞれあって、経験値のあるPMがいるとこちらもすごく楽ができるのですが、そうではないケースもあります。

日本では施主も設計者もPMが入るメリットをまだ感じたことがない方々が多いのではないのでしょうか。建築家も本当はデザインにだけ集中したいのであれば、建築家として雇われて、マネジメント業務はしないということもあると思いますし、海外ではそういうケースもあります。

協働の利点を知る

与那嶺 構造 私からも質問させてください。我々専門職の立場からすると、建築家はもっと専門家と組んで設計したいと思わないのかなと思うことがあります。もちろんファサードなど建築家で決められる部分もあると思いますが、建築家の経験値で決めるのだけではなく専門家に頼むのも自然な流れではないかと思うのですが、それがあまり進まないのはなぜでしょうか。

関本 核心をつく質問ですね。ひとつは費用のことがあると思います。私の場合は個人住宅が多いので、エンジニアの方への外注費を捻出するのがなかなか難しかったりします。ですから小規模案件の場合は自分の経験値や職人との協働の中で現実的なディテールをつくっていつているケースは多いかもしれません。それからやはりディテールを考えるのが楽しいので、それを人には渡せないと思うところも少なからずありますね。

会田（「Bulletin」WG） 先ほどの話のように、海外では必要であればファサードコンサルタントや防水コンサ

ルタントなどを施主が別に発注しますが、日本の場合、施主は建築家に頼めばワンストップでやってくれると思っているので、やはり費用の面で難しいですね。我々建築家が施主に専門家と協働する価値を説明し、普及していく活動も必要なのかなと思ったりします。

与那嶺 構造 私はArupに20年以上いて覚えたことの1つが、何かを突き詰めた時ほど面白い人が集まってくるということです。例えば難しい鉄骨の製作が必要な時にはいい作り手と出会えたりと、こだわった時ほどモチベーションの高い人やいい職人と出会える機会が多いです。設計も同じで何かをやりたいたいという気持ちが強いと、自然といろいろな人とつながる。そういう人たちとの協働はとても面白いですね。

関本 外部の構造エンジニアと協働すると、自分が思っていた以上のものが出てくるので、それが建築的な空間の飛躍にもつながります。今日お話をうかがって、さらに協働したくなりました。菅さん、繁永さんもArupのこと、また協働について最後にひと言いただけますでしょうか。

繁永 ファサード Arupは社内の仕切りがゆるいように感じます。他の組織事務所では意匠と構造、設備といった部署がきっちり分かれているイメージがありますが、そのあたりの垣根が低いので、すぐに相談できたり、社内でもコラボレーションしやすい環境だと思います。

菅 環境設備 私は組織事務所の設備設計部門にいたのですが、Arupはすべてのプロジェクトが社外の方とのコラボレーションなので、ネットワークが広がります。コラボレーションが当たり前前の環境に来たのがいちばん大きな違いだったと感じています。最近はこんな専門家も入れたいなどと自分で仕掛けていけるようになり、もっと面白くなってきて、やはり可能性を広げるためにはいろいろな人を巻き込むことだとよく感じます。オープンノベーションということを各企業も取り組み始めていると思いますが、これからそういう方向にどんどん進んでいくのだろうと、業務を通して感じています。

与那嶺 構造 設計はいろいろな分野の人がつながって実現していくものだとつくづく感じます。建築家の皆さんに、我々のようなエンジニアと協働する利点や面白さを知っていただいて、一緒にいい建物をつくっていただきたいと思います。

関本 今日は貴重なお話をありがとうございました。

インタビュー：2021年3月25日 Zoomで実施

参加者プロフィール



与那嶺仁志 (よなみね ひとし)

1970年愛知県生まれ。1994年日本大学理工学部建築学科卒業後、構造計画プラス・ワン入社。1998年Arup東京事務所入社。2000年香港事務所、2004年～07年ロンドン本社勤務。現在、Arup東京事務所 アソシエイト/ビルディングエンジニアリング(構造)。2018年～日本大学、工学院大学非常勤講師。



菅 健太郎 (すが けんたろう)

1977年東京生まれ。2001年早稲田大学理工学部建築学科卒業。2003年東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修士課程修了。2003～2009年久米設計。2009年Arup東京事務所入社。現在、Arup東京事務所 アソシエイト 環境設備リーダー/ビルディングエンジニアリング。慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス非常勤講師。



繁永 幸治 (しげなが こうじ)

1977年山口県生まれ。2003年大分大学大学院工学研究科建設工学専攻修士課程修了。カーテンウォールメーカー勤務を経て、2007年にArup東京事務所入社。現在、Arup東京事務所 シニアファサードエンジニア/ビルディングエンジニアリング。

対談をふりかえって

かつて建築家とエンジニアとの関係には、建築家が意匠を考え、エンジニアが技術面を担うという分業や序列という考えがありました。今回対談相手に選んだArupの思想にはそれがありません。そもそも日本の企業ではなく、哲学者でありエンジニアでもあった、オーヴ・アラップ氏の設立した(英国)企業であることも、そのメンタリティに影響しているのだと思いますが、今回3人の異なる立場のエンジニアの発言に共通していたのは、徹底して建築家と対等の立場でものを考え、同じ視点で建築を考えるということです。

往々にして建築家は、前述の考えから、まずは自分たちで建築のあるべき方向性を見定めてからそれをエンジニアに託し、実現へと導くという思考プロセスを踏みがちです。Arupのエンジニアの発言からはそうした序列が感じられず、建築のコンセプトが生まれるその瞬間に居合わせることで、また建築家と対等の立場でそれを生み出すのだという矜持や気概を感じました。

時にファサードデザインという、建築家が行うべき(とされる)最も重要なデザインプロセスにすらもエンジニアが関わっているということにも驚かされましたが、なかでも鮮烈な印象を受けたのは、環境設備エンジニアリングの考え方です。菅氏の関わったプロジェクトでは、自然の原理を使うことで最終的に電気設備も空調設備もない建築になったとのこと。いわゆる通常の設備設計の考えで言えば何も仕事をしていないことになりませんが、そこに残したものは紛れもなく「建築」であったということは、本当に目から鱗でした。

建築に課せられた使命は、目に見えないものを形にするということだと思いますが、光や空気、そして重力といった我々ですら見えないものを可視化できる彼らの能力は、これまで以上に建築に生かされていくべきでしょう。建築家がエンジニアとフラットな関係で建築をつくるという意味や意義について、深く考えさせられた対談でした。

(『Bulletin』編集長 関本竜太)

「協業」を考えることは 「分業」を考えること



小笠原正豊

はじめに

私は1996年に大学を卒業後渡米し、建築学の修士課程修了ののち、現地にて設計および監理実務を経験しました。2004年に帰国し、自身の設計事務所を設立。2007年から2012年まではI.M.Peiの遺作となったMIHO美学院中等教育学校プロジェクトに携わりました。この頃までに、日本における小規模な住宅と大規模な建築の設計や施工の流れを、自分なりに理解することができたと思います。

設計実務経験を積むと、学生時代には気づかなかったことがはっきりと見えてくるようになります。同じ「建築を設計して施工する」という行為でありながら、米国と日本における設計や施工の違いが気になるようになりました。そこで、2013年から2016年にかけて東京大学生産技術研究所 野城智也研究室の特任助教として学内プロジェクトに関与しながら、2017年に米国と日本の設計実務の違いに着目した「設計分業マトリクスを用いた設計プロセスのマネジメントに関する基礎的研究」と題した学位論文をまとめました。現在、東京電機大学未来科学部建築学科の准教授として教育に携わりながら、引き続き設計行為全般をテーマとして調査・研究も進めています。



PCF (Pei Cobb Freed and Partners, LLP.) 時代に携わったペルビュー病院(工事中)



MIHO美学院中等教育学校

『Bulletin』も新年度より通年特集テーマを「協働のかたち」として編集されるようですので、私もこれから4回にわたり、日本と海外(主に米国)の「分業」を前提に、設計や施工における「協業のかたち」について掘り下げてみたいと思います。

協業と分業

協業とは「一連の生産工程を多くの労働者が分担して協同的・組織的に働くこと」、分業とは「生産過程をいくつかの部門や工程に分け、異なる人々がこの分割された特殊的部分に専門的に従事すること」を指します。ある建築物の設計や施工過程において、多数の設計者や施工者が協同的・組織的に働く場合に「協業」が発生します。さらに、設計や施工過程をいくつかの部門や工程に分け、異なる人々が分割された部分に専門的に従事すると「分業」へと発展します。つまりこの段階で、単純な「協業」ではなく「分業に基づく協業」が実現されることとなります。

建築物の設計や施工を目的とした「分業」では、最終成果物を念頭に、生産過程をどのような部門や工程に分割するか、また分割された特殊な部分に対して誰がどのように従事するか、そして分割して生産された個々の成果物をどのように統合・再結合して最終成果物とするかについて、建築物の設計や施工に先立ってあらかじめ計画しておく必要があります。

建築物そのもの、および、建築物を計画・設計して施工するという行為は、太古の昔から存在してきました。一方で、近年、情報・設備機器の発達や暮らし方の変化に伴い、建築の「ありよう」は多様化・複雑化しています。同時に、建築がプロジェクトとして実現するための設計・施工ツールや発注方式といった「やりよう」もまた多様化・複雑化しています。多様化・複雑化した建築物を、もはや個人で全てを設計や施工することは不可能で、異なる人々の間における「分業に基づく協業」は避けられません。しかし、このような「分業に基づく協業」は、建築物の設計や施工の現場において問題なく実行されているのでしょうか？

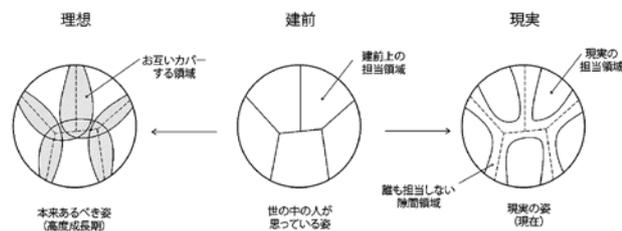
分業の隙間

2004年3月、六本木ヒルズにて大型回転ドアによる男児の死亡事故が起こったことを、皆さんは覚えていらっしゃいますか？

失敗学で有名な畑村洋太郎らは、原因を究明して事故防止につなげることを目的に、2004年6月から2005年3月にかけて、エレベーター・回転ドア・シャッター・スライドドアなどを対象に「ドアプロジェクト」を行いました。報告書では「衝突力低減のためにドアを軽量化しなければならない」という設計思想が失われていた経緯を明らかにしつつ、建前と現実の違いを図示したうえで、役割の隙間領域で事故が起こることを指摘しています。



森タワーの回転ドア（2004年4月24日撮影）Wikipediaより（注4）



役割分担の理想・建前・現実（注5）

畑村は「それぞれが自分の領域を固定化してほかからの干渉がないようにしようとする。さらに、自分の担当部分を他所から責め立てられないようにするために、だんだんと狭い領域を自分のものとして設定するようになり、その限定された領域内のことさえきちんとしておけばそれで責任を果たしていると考えられるようになる」と述べています。皆さんの実務経験の中でも、例えば設計者間、設計者—施工者間、発注者—設計者—施工者—運用者間などの関係者間に起こった問題について、いくつか思い当たる事例もあるのではないのでしょうか。

高度成長期における日本の製造業では、「阿吽の呼吸」や「暗黙の了解」に基づいた「すり合わせ」のうえ、役割分担を超えて互いが自発的にカバーするような環境をつくり出してきたと言われてしています。一方で、人口や経済規模の縮小とともに設計や施工の技能者が大量にリタイアする現在の日本において、このような古き良き手法を前提として、建築物の設計や施工を計画することに無理が生じています。さらに、世界的にグローバル化やICT/BIM化が進むなか、日本国内の閉じた状況で建築物の設計や施工を捉えることが、年を追うごとに難しくなっています。現代の時代や社会環境に適した「分業に基づく協業」のあり方を模索する必要があるのではないのでしょうか。

協業を促すには

ハーバードビジネスレビューの記事で、経営学において組織論を専門とするLinda Gratton と Tamara Erickson は、「チーム内で各自の役割が明確に定義・共有された時、つまり課された業務範囲の大部分を自分自身のみで遂行できると確信した時、コラボレーション（協業）はうまく機能する。チーム内での各自の役割が明確でない場合、各自の役割や分担を決めるのに労力を費やし、各自の業務に集中して取り組むことができない」と述べています。日本国内と海外といった調査対象における違いはあるにせよ、慣行上、役割や責任がとかくあいまいにされがちであった日本の建設業に対して、大変示唆に富んだ調査結果と考えます。

もちろんプロジェクトの規模や性質によっては、役割や責任をあえてあいまいにしたまま、関係者の自発的行動に任せて「分業に基づく協業」を行う方が、より自由で創造的な成果物を生み出すことにつながる可能性があります。GrattonとEricksonは「チームの最終目標に至るプロセスが幾分あいまいな方が、チーム内のメンバーはよりコラボレーション（協業）する傾向がある」とも述べています。プロジェクトに関する事項の全てを明確に定義していくのではなく、何を明確にして何をあいまいに残しておくべきか多角的に捉えたうえで、それぞれのプロジェクトに最適な「分業に基づく協業」を模索していく必要があります。そのためには、まず建築物の設計や施工の実務の状況を冷静に分析することから始める必要があるでしょう。

次号から、主に設計分野における日米の分業の違いについて、具体的にお話ししたいと思います。

〈注〉

- 『広辞苑』5版、岩波書店
- 経済学においては、分業のもたらす生産力の上昇効果に着目したアダム・スミスの立場に基づき、「生産過程をいくつかの段階に分け、複数の労働者が異なる作業を専門に分担する方式」（『岩波現代経済学事典』岩波書店）と定義する場合が多いが、本文では工程と部門の両方を含めた日本大百科全書の定義を用いる。
- 「マルクスは分業に基づく協業を資本主義的な労働編成のもっとも一般的な基礎とみなした。（中略）協業のうちには、分業を含まない、単純協業という概念も含まれる。」（『岩波現代経済学事典』岩波書店）
- 画像の著作権者：Gleamさん、ライセンス：CC by-sa Gleam、<https://ja.wikipedia.org/wiki/六本木ヒルズ森タワー>
- 畑村洋太郎 (2006) 『ドアプロジェクトに学ぶ—検証回転ドア事故』 日刊工業新聞社、p.175、役割分担の建前と現実（役割分担の隙間領域で事故が起こる）を参考に筆者作成
- 畑村洋太郎 (2006) 『ドアプロジェクトに学ぶ—検証回転ドア事故』 日刊工業新聞社、p. 175
- Gratton, L. and Erickson, T.J. (2007), *8 Ways to Build Collaborative Teams*, Harvard Business Review, November 2007, pp. 100-109
- 同上

吉川二郎 氏に聞く

ギターで描くスペインの情景

Pintando los paisajes por el sonido de guitarra

今回お話をうかがったのは、コンサートフラメンコギタリストの吉川二郎さん。25歳でスペイン・グラナダに渡り、フラメンコギターの巨匠マヌエル・カーノに師事。現在は関西を拠点に、オリジナル曲を中心に国内外で演奏会を開催しています。フラメンコギターを始めたきっかけや作曲方法、また吉川さん発案の楽器「ギタルパ」についてお話をうかがいました。

—まずコンサートフラメンコギターがどのようなものなのか教えていただけますか。

フラメンコというと皆さん踊りを連想すると思いますが、本場スペインではフラメンコは生き方そのものを指し、その表現の手段として代表的なものが踊りと歌とギターです。踊りや歌にはだいたいギターの伴奏がつきませんが、僕は伴奏ではなく、音楽としてフラメンコ曲をギターで独奏する、コンサートフラメンコギタリストとして活動しています。

—フラメンコギターはいつから始めたのでしょうか。

フラメンコと出会ったのは高校生の時です。高校では写真部に入ったのですが、中学の頃からギターを少し触っていたこともあり、高校1年の終わりに同級生に誘われてギターサークルに入りました。そのサークルの顧問の先生がフラメンコギターを弾いていて、僕はすぐにのめり込んでいきました。この頃、後にギターを教わることになるマヌエル・カーノ先生のレコードも聞くようになり、初めて聴いた時は自然と涙が溢れてきたことを覚えています。

大学ではギターを弾けるところがクラシックギター部しかなかったの、仕方なく4年間クラシックを勉強しました。今思うと、この時学んだ音楽の知識や感覚などが、その後の曲作りにおいてかなり役に立っています。

大学卒業後は会社に勤めましたが、精神的に辛い出来事があり、それを機に会社を辞めてギタリストになろうと決心しました。フラメンコにクラシック音楽の要素を取り入れて演奏しているマヌエル・カーノ氏の音楽に魅力を感じていたの、彼に習いに行こうと、1977年25歳の時、結婚したばかりの妻を連れてスペインのグラナダに渡りました。

—スペインでの修業はどのようなものだったのですか。

初めて先生の自宅に行った日、先生に「何か弾いてみる」と言われてフラメンコの曲を3曲ほど弾くと、「もっと弾け」と言うので、クラシックのバロック音楽を弾きまし

た。そうしたら先生が前に乗り出して聞いてくれて、ここで初めて「気に入った」と言って受け入れてくれました。

慣れない土地で生活しながらレッスンを受ける日々で、毎日10時間くらい弾いていましたね。その時はオープンチケットだったので1年間しかいられませんでした。その後は先生が亡くなるまでの約13年間、毎年1ヵ月ほどスペインに渡り、先生の教えを受けました。先生は音楽院で教えていましたが、自宅で学んだ内弟子は僕だけだと思います。

—帰国後、すぐに演奏の場があったのでしょうか。

1978年にスペインから日本に戻り、1988年に最初のアルバム「予感」を作るまでの10年間は大変でした。食べていくためには仕事をしないといけないのですが、そうすると練習する時間がなくなってしまうので、僕は仕事はせずに毎日練習を8時間くらいしていました。生活はしんどかったのですが大事なことだったと思っています。

独奏の仕事は自分でコンサートを開いて、自分でチケットを売っていくしかありません。スペインから帰ってきた1978年の秋に大阪でリサイタルを行いました。それからとにかく定期的にコンサートを開くように努めてきました。回を重ねるごとに人のつながりで輪が次第に大きく広がっていき、今では日本各地で演奏する機会をいただいています。

—スペインでも音楽活動をされているのですか。

1978年に初めてのコンサートをグラナダで行い、ドイツやアメリカでも演奏しましたが、2004年からは、ほぼ毎年スペインで演奏しています。

僕はフラメンコギターではなくクラシックギターを使って演奏しているのですが、今世界中で弾かれているクラシックギターは、スペイン・アルメリア出身のアントニオ・デ・トーレスという人が考え出した構造を元に作られています。1982年に僕がグラナダにいる時、カーノ先生が「今日はアルメリアから面白いやつが来る」といつて紹介してくれたのが、そのトーレスのひ孫のフラ

ンシスコでした。彼は家具などを作る仕事をしていましたが、友人のギターの修理をしたことをきっかけにギターを作り始めていました。先生が、彼が作って持ってきたギターを試し弾きし、これなら世に出せるということで、僕がそのギターを日本に持って帰ることになりました。弾いてみると素晴らしいギターで、そこからフランシスコとの付き合いが始まりました。

フランシスコの働きかけで、2004年からアルメリアで小さなコンサートを何回かやらせてもらい、2007年にはアルメリアの洞窟のフラメンコ倶楽部で演奏する機会をもらいました。フラメンコの愛好家の集まるお店で、「本場の人たちを前にフラメンコを演奏するのは怖い」と挨拶したら、そのオーナーが客席から「フラメンコは心だ」と声を掛けてくれてすごく楽になりました。そこで弾いてからはほぼ毎年、スペインのどこかで演奏させてもらっています。

——吉川さんは作曲もなさいますが、どのように曲をつくるのか教えていただけますか。

作曲は、作る技術があればできますが、大事なのはどういうテーマでどういうものを表現するかということです。僕は音で何かが見えるようにしたいと思い、作曲をするようになりました。最初はフラメンコ曲を自分なりにアレンジして、音楽をつくる技術を覚えていき、次にスペインの美しい景色を音にしたいと思い、イメージを音に置き換えて曲作りをしていきました。例えば、真っ赤なアマポーラ（ひなげし）が絨毯のように一面に咲き乱れているのを見て、そのアマポーラが波のように風になびく様子を音で描いて作曲しました。

最初はスペインの情景が題材でしたが、詩や物語からイメージするのも面白いと思い、「竹取物語」や「智恵子抄」を題材にした曲も作っています。「雪女」という曲では、雪が舞っている様子などを音で鳴らしたらどうなるか考えるのが面白かったですし、「星の物語」という曲はギリシャ神話が題材ですが、メロディーで配役して戦いを表現するなど、イメージを音に置き換えて曲作りをしています。これまででいちばん気持ちよく作曲できたのは「夜汽車」という曲です。出だしの踏切の音はいつか何かに使おうと10年くらい温めていた音で、萩原朔太郎の「夜汽車」という詩を見た時、これに使えろと思ひ、すぐに即興で弾きだして最後まで曲を作りました。楽譜には書いていません。

——作った曲は楽譜に起こさないのですか。

フラメンコギターは、自分で作曲して自分で弾くスタイルなので楽譜は要りません。有名なフラメンコ曲を演



左：吉川さんが大きく掲載された、アルメリアの新聞《La Voz de Almería》(2007.6.6付)。見出しには「初めてフラメンコギターを聴いた時、涙があふれた」と書かれている。
下：ギタルパ



奏する時も、大筋は同じでも細部はその日の気分によって毎回違う演奏をするので、楽譜があると逆に演奏が固まってしまうよくありません。

フラメンコでは少ないですが、よく楽譜を見ながら演奏する人がいます。それは台本を見ながら芝居をしているのと同じことで、そんな失礼なことはありません。楽譜なしで演奏できないようでは人前では弾けません。少々きつい言い方ですが、プロであっても舞台上に譜面台を置く人は練習をしていないんだなと僕は思っています。

——ギタルパという楽器についても教えてください。

1992年ごろ、突然右手の調子が悪くなり、演奏に苦勞していましたが、1994年にリハビリ用として、ギターとハープ（アルパ）が合体した、フレット付きの卓上ハープ「ギタルパ」を考えました。ギターよりもコンパクトで、基本右手だけで演奏でき、ハープのように弦が音階で並んでいるので弾くのも簡単です。最初に作ったものから、形や音響的な改良を重ね、最終的には音域はギターを越えて4オクターブ半以上あり、特許も取得しました。2010年頃にタラセア作家の星野尚さん（『Bulletin』2019年夏号「覗いて見ました他人の流儀」で紹介）と知り合い、タラセア（象嵌絵画）はスペインの技術ということもあり、星野さんのタラセアをギタルパにはめ込んでもらいました。また、ギタルパよりもコンパクトにした「ギタルピータ」というものも作って、最近はこちらでよく練習をします。

これからはフラメンコギターの演奏を続けながら、ギタルパの普及にも力を入れていきたいと思っています。

——貴重なお話をいただきありがとうございました。

インタビュー：2021年3月19日 Zoomで実施
聞き手：中澤克秀・関本竜太・望月厚司・青木律典（『Bulletin』編集WG）、相野谷誠志

PROFILE
吉川 二郎（よしかわ じろう）
コンサートフラメンコギタリスト
1951年大阪生まれ。15歳からギターを始め、1977年スペインに渡りフラメンコギターの巨匠マヌエル・カーノに師事。1978年、グラナダにて第1回リサイタル。1986年、日本人として初めての自作のフラメンコギター協奏曲を発表。1994年に「ギタルパ」を発案。自作の曲を中心に、日本全国や海外でもコンサートを行っている。

ブータンの 伝統的な集落と民家



吉村晶子

ブータンとの出会い

前任校に着任した2013年、ご縁あって伝統住居の実測調査に参加させてもらったのが私のブータンとの出会いである。ブータン人のプロポーション感覚はとにかく素晴らしく、大自然を背景に建つ彼らの建築には何とも言えない存在感と美しさがある。この調査ですっかりブータンに魅了された私は、翌年から調査団長を引き継ぎ、住居単位から集落単位に調査範囲を広げ、さらに3回の調査を仲間らと学生、そしてブータン王国政府で都市・地域に関わる若手技術者らと協働して行ってきた。

ブータンは日本人にとってかなり親しみを感じる場所である。ブータン人と日本人は人種がとても近いようで、はっとするほど日本人と似た顔・似た表情の人たちがいる。また、ブータンと日本は、同じ照葉樹林帯の東端(日本)と西端(ブータン)の関係にあり、稲を育ててお米を食べるところも共通している。チベット密教が国教であるので、人びとはみな敬虔な仏教徒であり、六界輪廻図などを見て育ち、その地獄絵に子どもごころに恐怖した記憶や輪廻に基づく死生観、また、四十九日までは成仏せずまだ中有に、といった話も通じる人びとである。いつも「すみませんすみません」と言いながら対応してこられる人びとでもある。海外にいるとは思えないような、懐かしいようなほっとするような場所である。

日本とブータンとは、このように近いところがある。けれども、ブータンの建築は、見たことのない建物ばかりで、なんとも興味深い独特の空間が広がっていた。



山を背に建つブータンの寺院。地形や風の道からみて理に適う場所に建っている。垂直の旗はダルシンと呼ばれる祈り旗で、旗に書かれた経文が風にはためくごとに1回お経を唱えたのと同じ功德が得られるとされている。

集落と住居の伝統的なかたち

集落の空間構造の要所にはチョルテン(Chorten: 仏塔)がある。多くは地形の特異点にあり、魔が山から降りてきたり風に運ばれてきたりするのを防ぐ。集落の領域の内外を画する地点に置かれるものもあり、外から集落に入る旅人は、そこで身なりを整え正装してから集落に入るようにしないと賊と思われて斬り殺されても文句は言えない、というのが一昔前の常識であったという。家々にはルー(Lue)と呼ばれる小さな祠があり、こちらは仏教由来でなく土着信仰に基づく。家を地上に建てる際には地下におわす地中を司る神(地域により異なる)に伺いをたて、ルーを建ててなだめて祟りを避ける。どの集落にも寺および集落内各所にダルシン(Darshin: 祈り旗)があり、死者が出た際に供養の108本のダルシンを山に立てる風習もある。集落近くに里山(Sokshing)があり、その先の山々は遠く神聖なる山嶽まで続く。これらのものがブータンの風景をかたちづくり、人びとを見守っている。

伝統住居は、地方や標高により様式に違いはあるが、主に版築(地域により石積)と木造の混構造で構成される。屋根は躯体とは別構造の小屋組で支えられ、その軽やかな姿から flying roofとも呼ばれている。調査して分かってきたことは、伝統住居は「牛の家」「仏の家」「人の家」からなるということである。以下、ブータン西部パロ県での調査をもとに語る。

「牛の家」は、住居最下層(1階)にある。家族の大切な財産でもある牛を家の中で飼うのが伝統住居の原型である。出入口のほかには通気用の小窓しかなく暗い空間だが、厚い版築で囲まれ、寒い冬にも熱を逃がさない。一方、



ブータン人の少年。この風土のなかで、自分の心の中の龍を大きく育てていく。



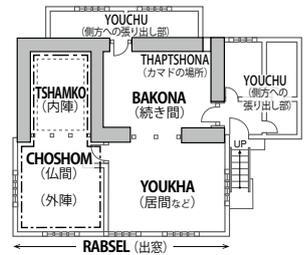
山裾のチョルテン。山(左側)から降りてくる魔が集落(右側)に入るのを防ぐ。この集落では他に風が魔を運びこむのを防ぐ辻のチョルテンもあった。



ブータン西部の伝統的集落。住居建築の屋根にかけてのプロポジションが美しい。前に水田、後に里山があり、写真左側ではダルシン（祈り旗）が風に揺れている。



この集落の住居外観の例。これは村長の家で、3層目にある出窓（RABSEL）の各部に宗教的祈りをこめた装飾がよく見られる。なおブータン建築のRABSELには、西部パロ近郊の住居によく見られるこの様式の他にもさまざまな形式があり、ブータン政府公開のBhutanese Architecture Guidelines (2014)に多くの例示とともに解説がある。



主要な居住空間がある住居最上階（屋根裏を含め4階建てなら3階）の間取り例（左の写真とは別の住居）。階段を登ってこの階に入り右回りに進むと、続き間を経て出窓に面したYOUKHAの生活空間に至る。さらに右回りに進むと、仏様がおわしますTSHAMKOが最奥にある。

「仏の家」と「人の家」は、住居最上層（屋根裏を除く）にある。「仏の家」は、内陣外陣2間続きの仏間（CHOSHOM）のうち内陣にあたる方の部屋（TSHAMKO）である。仏教国ブータンではどの家にも仏間があり、なかでも内陣の仏壇周囲の空間は、背面と両側面の3辺が開口のない版築壁（家により一部間仕切壁）で囲まれ、大切な仏様をしっかりと護っている。残る1辺は外陣の部屋と繋がり、そこで仏事が営まれ祈りが捧げられる。内陣と違い外陣は祈る空間、つまり人がいる空間だから、窓があり風と光が入ってくる。「人の家」の中心となる部屋（YOUKHA）は外陣に隣接し、普段は居間、食事時には食堂、来客時は客間、夜は寝室として使われる。この部屋に見られる大きな窓は、窓のある壁の1辺全体が躯体より外に出た独特の出窓（RABSEL）の重要な部分を構成し、善き（RAB: good）清らなる（SEL: clarity）風と光を家の中にもたらす。この窓は、男性器または女性器を表す形の窓枠が付き、子孫繁栄や吉祥の象徴や文様に彩られた特徴的外観を形成するとともに、室内の空間作法上も特別な価値をもち、窓に近い方が上座になる。来客時や食事時等この部屋に人が集まる際、伝統的作法では当主の座を囲んで人びとが輪となり、人数が増えても輪を二重三重にはせず輪を大きくして必ず一重とし、窓に近い上座側から年齢や位の高い者が座り、年少者である子どもたちは窓から遠い下座側へと座る。そうして子どもたちは「人の家」の輪のなかで、大人たちのやりとりや作法を見て育っていく。

近年の変化と人のかたち

ブータンの集落・住居は近年急激な変容をとげつつある。例えば、住居の屋根は、伝統的には板葺きの上に石を置いた素朴な石置屋根であったが、森林保護のために木の伐採が厳しく制限されるのに伴いトタン屋根が推奨されていった結果、今では多くがトタンに替わっている。木の伐採がよろしくないということで、寺のダルシンの柱も木から真鍮製に替わり、死者供養の108本のダルシンも、柱の木が調達困難で風習が廃れつつある。また、

道路整備が進み、遠くから建材を運ぶことが容易になり、外来建材の使用が進んでいる。調査時に増築工事をしてきたある家では、家族がインドで買ってきた煉瓦で意気揚々と壁を作っていた。彼らにとって憧れのハイカラな建材らしい。家の内部にも変化は及び、ソファーやテーブルなどの西洋家具を置く家が増え、部屋の用途が固定化されつつある。また、近代的衛生思想が入ってくると、家屋内での牛の飼育が禁止され、1階の「牛の家」の用途が失われた。中部トン集落（住居は主に石積と木造の混構造）を調査した際は、こうして空いた1階部分を居室とするため石積壁に通風採光の窓を設ける改装をした家が多く見られたが、主要な出窓のある上階と1階とで窓の基線が揃わなくなるなど外観意匠に変化が及んでいた。

時代が変わると景色も変わる、というのは、ある意味自然なことだが、変化が急すぎると歪みも懸念される。ブータンの近代化は急速に進んでおり、ある政府高官は「我々世代が政府の中核を担っているうちは、国の方向を決めるような重大な意思決定の際にもブータン人として正しいと思える決断をしていけると思う。けれど、次の世代が担うようになった時どうなるかは分からない。我々とは違う判断になるかもしれない。我々世代は地方の伝統的な家で伝統的な暮らしをして育ってきたが、次世代にはそうした風土にふれることもなく都市の近代化した生活しか知らずにきた者も多い。ブータン人の“人のかたち”が変わってきているのではないか、という気がしている」との危惧を話していた。生活が変わると住居も変わる。住居が変わり風景も変わると、そこで育つ子どもたちは、以前とは違う“人のかたち”をした人間になる。この彼の危機感には大いに共感を覚える。そして私たちもまた、この問題を共有する者である。彼らはその意味でも貴重な友人・仲間であり、今後も学び合っていきたい。

吉村晶子（よしむらあきこ）

東京大学建築学科卒・東京工業大学大学院社会学専攻修了。博士（工学）・RLA。国土交通省国土技術政策総合研究所、千葉工業大学などを経て、現在、名城大学環境創造工学科教授。著書に『日本風景史』（共著）など。

JIA 中国支部建築家大会 in 米子 2020

菊竹清訓 ホテル東光園

誕生の舞台裏—遠藤勝勸氏に聞く

中国支部鳥取地域会
来間直樹

中国支部の建築家大会

中国支部では、5県持ち回りで支部建築家大会を毎年開催しています。大会のプログラムはそれぞれ主幹する地域会が趣向を凝らしますが、主にその地域に根ざしたレクチャー、シンポジウム、街並みや建築の見学会などを実施しています。また、11回を数える「中国建築大賞」の審査講評、表彰も行われ、初回から10年審査委員長を務めていただいた内藤廣先生、昨年から引き継いでいただいた古谷誠章先生にも参加いただいています。

鳥取地域会は8名(おそらく全国で最小の地域会)ということもあり、お隣の鳥根地域会と共同で大会を開催しています。鳥取県での前回開催は2012年で、鳥取県東部の山裾の小さな城下町、鹿野町にある廃校をリノベーションした劇場「鳥の劇場」を会場に開催しました。参加者全員が現地の同じ温泉宿に宿泊(合宿方式と呼んでいます)して懇親も図るなど、都市部ではできない地域らしい大会となりました。鳥取県での開催はそれ以来です。

「ホテル東光園」を題材に対談を計画

ご存じのように、「ホテル東光園」は建築家菊竹清訓の代表作の1つです。1964年10月に竣工したこの建築は、その年に国立公園大山で開催された「全国植樹祭」にご臨席になる昭和天皇の宿泊場所をつくることをきっかけに新築されました。それにしても35歳の若手建築家がその設計を担ったことは、驚くべきことです。

私は菊竹事務所に数年在籍し、東京で事務所を立ち上

建築家菊竹清訓の代表作
「ホテル東光園」

げた後、2006年に郷里の米子に拠点を移して今日に至ります。事務所OBということもあり、各地から東光園を見学に来られる建築家の方や学生さんなどをご案内してきましたが、特にこの数年その回数が増えていました。折しも菊竹先生の没後10年ということで、2021年1月22日から鳥根県立美術館の企画展「菊竹清訓 山陰と建築」が予定されていまして、2020年度の支部建築家大会は、東光園を会場に展覧会に関連したものにしたと考えていました。そこで、菊竹事務所の元副所長で菊竹先生を40年にわたって支えた遠藤勝勸さんをお招きし、東光園の設計の経緯や当時のエピソード、舞台裏のお話をうかがう機会としました。遠藤さんとの対談を早稲田大学の古谷先生に、全体のコーディネートを齋藤信吾さん(建築家、元早稲田大学講師)にお願いしました。お2人は、国立近現代建築資料館で2014年に開催された「建築のこころ アーカイブにみる菊竹清訓」展に向け、遠藤さんと共に菊竹事務所に残る図面をはじめとした、膨大な建築資料の整理を担われ、その後も旧都市市民会館の保存等にも尽力いただいています。

コロナ禍の中、大会開催について議論がありましたが、鳥根県立美術館での展覧会が予定通り開催されたことを受け、対面での実施に踏み切りました。山陰両県以外からの参加が難しいことと、全国の多くの方と大会を共有したいと考え、YouTubeによる同時配信にチャレンジしました。

スライドを見ながら設計エピソードをうかがう

大会のスタートは、齋藤信吾さんのレクチャーから。東光園解説「柱は空間に場を与え床は空間を規定する」と題して、当時の菊竹先生の評価や、東光園がいかなる建築でどう位置付けられたのか、わかりやすくお話しいただきました。東光園は出雲と伊勢の実験的融合であり、古代建築の様式を現代に展開したものではないかという齋藤さんの仮説はととても興味深いものでした。

その後、遠藤さんと古谷先生の対談に移ります。お話の内容に応じ、齋藤さんに200枚以上のスライドから関連した写真や図面を表示していただきます。遠藤さんが



斎藤信吾さんのレクチャー



遠藤勝勲さん(左)と古谷誠章先生の対談

口火をきり、1963年の出雲大社庁の舎の竣工式と京都国際会議場のコンペの話から始まりました。驚いたことに、最初の45分間は遠藤さんが喋りっぱなしで会場は圧倒されました。古谷先生の「そろそろ聞いてもいいですか？」の間の手に、会場にはどっと笑いが。その後お2人の対談が続き、終了まであつという間の2時間でした。

私が印象深く感じたのは以下のエピソードです。

- 京都国際会議場のコンペでは4ヵ月間事務所の仕事を全てストップして取り組み、アイデアを皆で出し合った。それが東光園や佐渡グランドホテル、都城市民会館の設計に生きている。コンペ後、東光園の設計で行き詰まると数人で議論が始まり、京都国際会議場の「世界」に戻るとアイデアが出て設計が進んでいった。京都国際会議場のコンペは落選したが、仮に1等であったら、東光園や都城市民会館、佐渡グランドホテル等は生まれていなかった。
- 島根県立博物館の設計者に決まり田部知事を訪ねる際、当時東光園で作庭していた彫刻家 流政之から、米子から山陰の風土を感じ、人と交流しながら松江に行くようアドバイスを受け、その後も東光園に逗留することとなる。それが「ホテル東光園」の設計につながっていく。また、所員には現場監理で地方に赴く際、設計図通り施工するのではなく、流氏のアドバイスと同じように、その地域の風土を感じながら設計をやり直すよう指示した。
- 菊竹先生は、所員もそれぞれの「か」「かた」「かたち」を持っていると思っていた。よって所員を信じ、具体的な「かたち」を指示することはしなかった。

その他、現場でのエピソード「砂利の交換」、「左官との喧嘩話」、「ガラスの避難階段誕生秘話」など、現在では考えられないようなお話ばかりでした。

わずか1年の工期の中、メールもFAXもなく、1人で途方もない検討事項をこなした、当時29歳の遠藤さんの建築をつくる気持ちの強さはとても真似できません。現在もただ図面を渡せば建築はできるはずもなく、現場監

理でもじたばたしているばかりでしたが、改めてお話をうかがい、まだまだ覚悟が足りないと思うばかりでした。

建築を次の世代に伝えていくために

前述のような建築メディアに載らないエピソードの中に、建築をつくるための大切な何かがあるのではないかと私は以前から感じていました。今回の大会の目的は、対談をきちんと記録し次の世代へ伝えること。ぜひそれぞれの「大切な何か」を感じ取ってほしいと思います。

東光園本館は2017年に登録有形文化財に登録されました。その際の記念シンポジウムとして伊東豊雄先生をお招きし、同じく東光園ロビーにてシンポジウムを開催しました(日本建築学会中国支部鳥取支所主催、JIA鳥取、島根地域会共催)。この支部大会は、その第2弾とも言うべき位置付けとしています。今後も、東光園様のご協力のもと、このような機会をつくっていきたいと考えています。

米子市には東光園のほか、村野藤吾先生の米子市公会堂、佐藤功一先生の旧米子市庁舎(現山陰歴史館)と早稲田大学を代表する建築家の作品が残っています。米子市公会堂は耐震改修が終わり長寿命化の一步が計られています。旧米子市庁舎も文化財として、時間はかかるでしょうが今後の整備が期待できます。一方東光園ですが、老朽化がかなり進んでおり、すぐにでも手をつけなければいけない状態です。しかしながら民間企業ゆえの難しさ、コロナ禍でのダメージもあり、その方向はなかなか見えません。この建築を次世代が引き継ぐためには私たちに何ができるのか、地元の建築家として地域会のメンバーとともに考えていきたいと思っています。ぜひ全国のJIA会員のみなさまのお知恵もお貸しいただけたらと存じます。

最後に、対談内容についてはYouTubeで公開している動画もぜひご覧ください。

■ JIA 中国支部建築家大会 in 米子 2020

「菊竹清訓 ホテル東光園誕生の舞台裏—遠藤勝勲氏に聞く」

<https://www.youtube.com/watch?v=WXlM0Afv4E>

新宿の生きている風景

—営みや文化を感じる都市公園と街並—



新宿地域会代表
広谷純弘

2015年開催の第24回保存問題東京大会時に、東京14地域会の協力のもと「未来へ継承したい環境・景観・建造物・建築物」をテーマにまとめ、大会シンポジウムで各地域会から発表されました。その時の資料をベースに「未来へ継承したい風景」として連載しています。

新宿地域会では「新宿建築100景」という、新宿区内の優れた景観を紹介するマップを発行しています。この中には単体の建築から公園、街並とさまざまなスケールの景観があり、建築家の関わったものやそうでないもの、歴史的なものから現代につくられたものとさまざまです。そう考えると都市とは、いくつもの表現や価値観や歴史がからまった織物のようなものだと感じます。

もちろん残したい風景はたくさんありますが、今回は都市公園と街並に絞って話を進めたいと思います。それも文化的な観点ではなく、生きている風景とでも言いましょうか。目の前に見える風景だけでなく、そこに人間の営みや文化といったバックグラウンドを感じられ、これからも時間とともに成長していく、そういった思いを尺度に選びました。

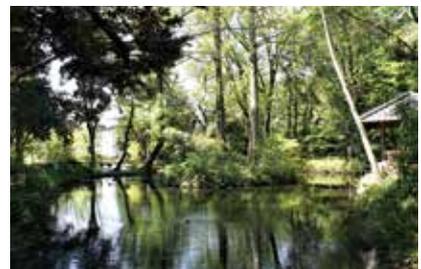
新宿御苑

新宿御苑は徳川家臣・内藤清成の下屋敷跡をその基とし、明治時代にほぼ現在の姿となりました。戦前は非公開の施設でしたが、戦後の民主化に伴い「国民公園新宿御苑」として開放され、現在に至っています。

片山東熊設計の旧洋館休憩所から2012(平成24)年竣工の新宿御苑温室(日本設計)まで新旧の建築が建ち、初代温室の遺構が保存公開されている、歴史を感じさせる公園です。整形型庭園や日本庭園と風景型庭園が大らかにつながり、自然なシークエンスを構成しています。そして季節ごとの自然の美しさは心に響くものがあります。園路を進めば、うっそうとした森に出会うこともあり、森を抜けると視界が広がる場所に出ます。そこでは新宿の今の風景に出会うことができます。この公園の面白さは、この都市の風景と公園との関係にあります。周囲の街の変化と公園の中の変化の時間には異なる流れがあり、木々の向こうに広がる都市の変化を際立たせています。そしてこれこそがこの公園のもつ大切な価値なのです。また、街で見る建築とここから見る建築では何かが違って、少し優雅に感じられます。それはここから眺める街には、街がもつスピード感を感じさせないからだだと思います。



新宿御苑



おとめ山公園

おとめ山公園

おとめ山公園は、目白通りから神田川に下る傾斜地に位置し、周囲は静かな住宅地に囲まれています。水平に広がる地形の新宿御苑とは、周辺環境とともに全く異なる構成の都市公園です。公園の名前は、江戸時代に将軍家のお狩場で立ち入り禁止の「御留め山」であったことに由来します。明治に入り近衛家の所有になりましたが、その後相馬家が半分を購入し、長岡安政の手により回遊式庭園を築造。その一部が今も残っています。その後大蔵省が大部分を所有していましたが、荒れ果てていたため、地元の人々が大蔵省に陳情して、1969(昭和44)年に新宿区立おとめ山公園として開園されました。さらに大蔵省の宿舍や大きなお屋敷の跡地を吸収し、2014(平成26)年にはかつての倍近い面積に

拡張され、現在の姿になっています。高低差を生かした園路や、せせらぎや池、森の構成には野趣が感じられ、子どもたちの遊び場や散歩コースとして地元住民に親しまれています。私も子どもが小さい頃には、よく遊びに連れて行きました。おとめ山の森は、武蔵野の自然を残したいという近隣住民の熱心な保存運動の賜物です。環境保護を先取りした住民の自発的運動の精神こそ継承すべきもので、この風景とともに伝え残していかなければなりません。

新宿副都心

新宿西口広場の立体的な構成から延びる軸線を基に広がる超高層群は、スケール感をそろえて並び、完成当時は超高層を群で感じる貴重な景観だったと思います。ビルの足元には、植栽や水を用いたヒューマンスケールの空間がデザインされていて、人々が集うようにさまざまな工夫がなされています。しかし、初めて都庁と議事堂を結ぶ2本のブリッジの下を車で走った時、このスケールは車のスピードで感じる景観だと思いました。この街は人と車の2種類の感覚で捉えるともっと理解できるようになると感じます。

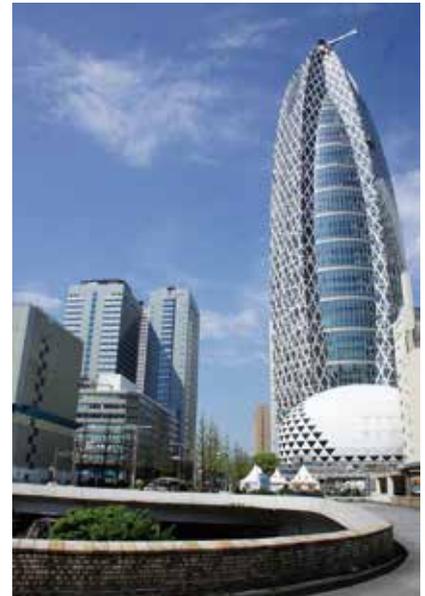
近年ではモード学園コクーンタワーのシルエットに都市景観に対する新たな可能性を感じます。この建物の誕生がこの街の風景に強烈な個性を与えました。また、住友ビルの足元の大屋根は、超高層が建築を超えた都市のインフラとして今後もさまざまに変化していく存在であることを示しています。コロナ禍を経て、今後この街はどう変化していくのか、いくつもの価値観で捉えていかなければなりません。私にとって新宿副都心は都市というものを考える問いかけに気づかせてくれる街なのです。

神楽坂

神楽坂は、江戸の面影を残し、伝統と現代が共存する魅力的な坂の街です。江戸城外郭門の1つである牛込門を起点に延びる神楽坂通りの両側に展開する街は、独特の情緒を感じさせる数少ない花街の風情を残しています。車が入っていけない石畳の路地は幾重にも曲がり、街の全貌を把握することができません。そこにこの街の魅力があるのです。文学者や芸術家に愛された料亭が徐々に姿を消してきたのはさみしいことですが、代わりに今の時代にふさわしい店が並び始めています。業態はさまざまですが、古い建物を改装した店や、無くなった石畳や黒塀を復元する店もあります。それが古くからの店と軒を並べているのは、街としてある種の健全さとパワーを感じます。

ゴールデン街

あえてゴールデン街を選びました。新宿副都心は計画してつくられた街なのに対し、ここは自然発生的といってもよいくらいに原型が見えない街です。建築や都市計画といった概念とは無縁で、時代の必要性に合わせるようにして改装を重ねてきた、時代のコラージュのような街なのです。そこに集う人々がつくってきた街ともいえるかもしれません。青線地帯から始まり、演劇人や音楽家や文学者、デザイナーなど文化人が集う文化発信の拠点の時代を経て、この街は今また新しい時代に入っています。若い世代が思い思いの店を出して新しい店と古くからの店が共存し、そこではしご酒をする。時として店主が他の店に顔を出すこともあります。このコミュニケーションの在り方は独特で、夜の街ならではのようです。新しい世代がこの街を好むのはなぜなのかを感じなくてはなりません。ここには絶やしてはいけぬコミュニケーションの形があって、私にとっては未来に残したい風景の1つなのです。



新宿副都心



新宿副都心



神楽坂



ゴールデン街

「今」は歴史の最中

—歴史を繋ぐというまちづくり—



新潟地域会
伊藤純一

古い建物の保存活用に関する活動に約20年関わってきました。現在も事務局として活動を続ける「新潟まち遺産の会」は新潟市が歴史を感じられるまちにしたい、と古い建物を通じてまちづくりにコミットする市民団体です。

新潟市中心部はかつて湊町として栄えたことからか商人気質のまちとして、古いものより新しいものに目を向ける傾向があります。300年以上も前の町建てで生まれた町割にはかつて堀が巡らされており、まちそのものが湊でした。しかし戦後の経済復興期、また新潟地震後の復興需要により、当時水質も劣悪化していた堀を埋立て道路拡張する事業が、当たり前のごとく行われました。当時の市民の中に堀の保存を願った人はどれだけいたことでしょうか。もし今当時のまま堀が残っていたら、新潟は世界にも誇れる魅力ある水の都になっていたと思います。現在堀を復活させようとする活動もありますが、現実的には一度失ったものを取り戻すことがどれだけ容易なことではないか、多くの市民は悔恨の思いを抱えています。

上質で貴重な歴史的建造物に消失の危機が囁かれると、その建物の価値や魅力が伝わるシンポジウムや見学会などを市民向けに企画し、多くの人に保存活用の意義を問いかけてきました。功を奏し保存活用が叫ぶ建物もありましたが、消失を免れなかった建物も少なくありません。危機が表面化してから運動するのでは間に合わないことを痛感し、歴史的建物がまちのなかでどれだけ価値を持っているのか広く市民に知ってもらう活動、対処療法ではなく予防療法が重要と思い、現在はそちらに力を注いでいます。

建物の話ではないですが、祭礼行事に長く関わっています。生まれ育ったまちの氏神神社には神事である祭礼が200年ほど続いています。子どもの頃から接し今でも保存会に名を連ね関わっています。祭礼、祭り行事は何気なく何百年と継承しているわけではありません。口伝体伝で伝承する祭り行事は、決して大きな変革を求めず、むしろ地域でブラッシュアップして次世代へ繋ぐことを皆心掛けています。200年続いてきた歴史には100年目

150年目といった過去の「今」という通過点があり、またこの先300年目400年目の歴史から見ると今の200年目は中間点と言えます。「今」は歴史の最中、つまり歴史とは今を繋ぐことの結果なされてきたことなのです。

まちも同じことのように思います。町並みやまちの営みは歴史を繋ぐこと、今を継承することで層の厚い魅力あるものになります。今あるまちを今までの歴史を理解し継承し次の世代に引き継ぐ、それが現代のまちづくりだと考えています。安易にスクラップアンドビルドせず、引き継ぐべき価値や魅力を伝え一步一步引き継いでいくことで良好な継承が生まれるのではないのでしょうか。

祭礼祭り行事がうまく継承されている私が生まれ育ったまちは、縄文時代にできた砂丘上に地形なりに道ができた迷路のようなまちです。戦後まもなくまで機業で隆盛を極めた当地には、豊かだった時代の象徴として土蔵など歴史を感じさせる建物がまだまだたくさん残っています。この建物、景観、歴史を良い形で継承したい。世代交代や時代の変化で一気に町が変貌していくことを今までの活動の中でたくさん見てきました。私自身がこの価値ある土蔵や蔵を活用することで魅力を伝え、まちの歴史継承を促したい。そんな思いから昨年末、まちの景観に寄与する置屋根真壁蔵を借り受け事務所に移転しました。

歴史を継承することは今あるものの価値や魅力を見だし次世代に引き継ぐこと。「今」は長い歴史の通過点で、でき上がる歴史がどんなものになっているかはわかり得ません。それは次世代その先の世代が繋ぎ続ける結果なので。私たちの役割は次世代に良好に繋ぐこと、そのた

めにも今、価値ある古い建物やまちの魅力を伝える活動が重要なのだと考えています。



景観に寄与している置屋根真壁蔵を活用し自らの事務所とした

失敗から知り得た 「ZOOM オンラインオフライン同時配信」 虎の巻



神奈川地域会
井上雅宏

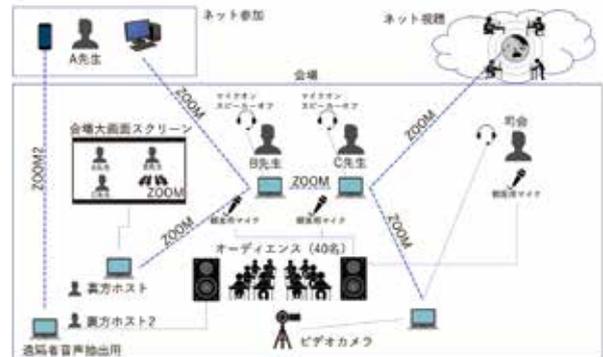
横浜旧市庁舎が解体されることをテーマに、JIA神奈川、横浜市、横浜歴史資料調査会と共催でシンポジウムが企画された。12月5日にシンポジウム1、12日にシンポジウム2と、2週連続オンラインオフライン同時配信を行った。我々は大人数向けのZoomウェビナーは初めてだったので入念にリハーサルをすることにした。会場150㎡ほどの空間に、40名の座席と3名のパネリストの座席、パソコンを配置。また、ビデオカメラはHDMIビデオキャプチャーを介してパソコンからZoom配信した。

リハーサル初日 まず予想外の問題が起きた。会場拡声スピーカーの音や隣の人の声をパソコンの集音マイクが拾い、Zoom上の音はお風呂場でこだましたようになった。そこで、余計な音を拾わないようにインカム(イヤホンマイク)を購入し、パネリストにつけてもらうことにした。この時点で完璧にZoomとの連動が実現した。

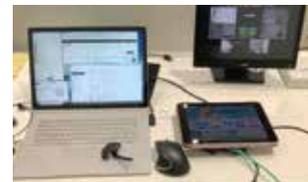
しかし、パネリストの1人が都合によりネット参加することになってしまった。発言者が1人でもZoom参加となると、Zoom上の音を会場で流す必要が出てくる。しかしそうなると会場での発言もZoomに乗ってしまい、ネット回線経由でタイムラグをもって、再び会場に流れるエコー現象が発生する。特定の人の声をミュートできればよいが、今のところZoomにその機能はない。話者自体をミュートしてしまうと、ネット視聴でも聞こえなくなってしまう。

困りあぐねていたがスタッフの1人が、別のZoomを構築すれば打開できるのではとアイデアを出した。遠隔パネリストもまず本体のZoomに参加する。ネット視聴、会場の映像についてはそれで事足りる。問題なのは会場音声である。まず、会場スピーカーは先のハウリングのためZoomの音を流せないと判断し、話者の拡声のみに限定した。そして、遠隔参加パネリストはiPhoneを持って話してもらい、別のZoomを構築し、その音声を別の会場スピーカーから流した。つまり、普通にZoomに参加して会話すると同時に、音声抽出用として別のZoomを使い会場用に音を流すこととし、見事にこれもクリアし本番の準備が整った。

シンポジウム当日 当日、遠隔パネリストの不具合を考慮し、あらかじめ講義を録音したムービーを流す方が楽だろうと、会場スタッフが気遣ってくれた。しかし、そのビデオがうまくネット配信されず、会場の進行が完全にストップ。私は茫然自失しフリーズしてしまった。横にいた中澤克秀氏がそれを見て「もう一度1からセットアップをやり直そう」と声をかけてくれ、司会が瞬時に観客を止めて取りつ



ネットワーク構築図



メインホストの操作環境(デュアルモニター)

ないでくれた。中澤氏の判断が功を奏した。デュアルモニター環境でZoomからムービーを流すと、バグが発生するようである。順序よくムービーを起動するとそれが回避できる。当日は運よく、その手順が成り立ち奇跡的にムービーが動き始めた。

一難去ったと思ったその後、ディスカッションになり、今度は遠隔の先生の音が途切れ途切れになる現象が発生した。もはやディスカッションではなく、何が何だかわからない会となった。これについては、Bluetoothを頼りに構築したため、電波が途切れたのだと思う。できるだけ無線を使わず有線で行うべきであった。

よくムービーを起動するとそれが回避できる。当日は運よく、その手順が成り立ち奇跡的にムービーが動き始めた。一難去ったと思ったその後、ディスカッションになり、今度は遠隔の先生の音が途切れ途切れになる現象が発生した。もはやディスカッションではなく、何が何だかわからない会となった。これについては、Bluetoothを頼りに構築したため、電波が途切れたのだと思う。できるだけ無線を使わず有線で行うべきであった。

初のオンオフ配信の経験から シンポジウム1の受講者のアンケートはさんざんな結果であった。あまりにも無残な出来で申し訳ないという思いでいっぱいである。今回、最も難しい構築をし、大概の失敗を経験したため、翌週開催したシンポジウム2ではリベンジでき、おかげでZoom配信の壺は心得ることができた。これを糧に今後も新たなチャレンジをしていこうと思っている。この文章が幾ばくかの転ばぬ先の杖になることを願ってやまない。



オンラインセミナー開催概要

シンポジウム1 2020年12月5日
「旧横浜市庁舎の歴史・文化的価値を探る」
シンポジウム2 2020年12月12日
「旧横浜市庁舎の可能性について～20世紀建築の保存と活用を考える」
宣伝媒体：Peatix、JIA神奈川HP、Google フォーム
アンケート：Google フォーム
オンライン：Zoom ウェビナー
オフライン会場：横浜市府所1階 市民協働推進センタースペースA・B

建築家による アーバンデザインへの気づき



小林正美

私にはメンターと呼ぶべき4人の師匠がいる。大学の研究室で直接指導を受けた芦原義信先生。就職後、国際的視野におけるデザイン実務やプロポーションの美学を学ばせていただいた丹下健三先生。ドクター論文の指導の中で、建築設計の心を学ばせていただいた香山壽夫先生。さまざまな場面で都市と建築のあり方を学ばせていただいた楨文彦先生である。香山先生以外の先生からは、外部空間のデザイン、街並み景観、都市における象徴性、群造形による都市デザインなど、共通して建物と公共的外部空間の関係、すなわち「アーバンデザイン」の考え方と手法を直に学ばせていただいた。振り返ってみると、33歳の時にハーバード大学デザインスクールのスタジオで、クリーガー教授から学んだのもアーバンデザインであったし、53歳の時にカリフォルニア大学バークレー校でボッセルマン教授と教えたときも、サンフランシスコを舞台にしたアーバンデザインスタジオであった。

もともと大学の建築学科へ進学する前は、建築家の仕事は裕福な人たちのために造形的に美しい建物をつくることだと誤解していたが、次第にさまざまな人々の生活を包み込む社会に貢献する空間を計画するという道が開かれていることがわかり、これこそ自分が目指すべき道だと気づいた。遅きに失したが、いわゆる公共性の重要さにこの頃初めて気づいたのであった。ある時、「あなたはアーバンデザインの申し子だから、ぜひ貫き通すべきだ」と後輩に言われ、その後少しずつ意識したが、建築設計に軸足を置きながらも、これほど自分がアーバンデザインやまちづくりに関わることになるとは思ってもいなかった。丹下事務所から独立後は、到底アーバンデザインや公共工事に関われるような機会はなく、狭小住宅などを設計する時期が続いたが、1992年に明治大学建築学科に職を得てからは、多くのゼミ生を抱える私立大学の特徴を生かし、専門家の卵としての学生がまちづくりに参画できる機会を模索するようになった。事務所では建築設計の仕事に励み、大学ではまちづくりの実践を教えるという二股生活が始まったのである。

それが具体的に発展したのが、岡山県高梁市たかはしという小さな町で始めた合宿形式による「シャレットワークショップ」

によるまちづくりであった。これは町の困りごとを行政や市民から聞き取り、解決後のビジョンを考えながら、さまざまな空間表現によりその解決法を提示するという、欧米ではよく行われている集中的ワークショップである。今でこそ多くの大学の研究室がまちおこしに貢献しているが、当時は神代雄一郎のデザインサーベイや原広司の集落調査が一段落した頃で、まだそれほど展開されていなかった。その後、その教育的・社会的効果が認められ、日本建築学会では毎年「市民と学生の連携によるシャレットワークショップ」を国内各地で開催し、現在まで15回を数えるようになった。この根底には、「建築家は、曖昧で抽象的な思いを具体的な空間に翻訳できるという誰にも真似できない重要な技術と能力を持っており、その能力を一般市民によるまちづくりにぜひ生かすべきである」という信念があり、このことを常日ごろ学生たちには言い伝えている。

そのような流れの中で実現したのが、姫路駅前の広場である。これは単なる交通ロータリーの集積になろうとしていた行政の整備案に対し、学生ワークショップ、専門家ワークショップ、市民ワークショップなどを展開して、歩きやすい(ウォークアブルな)駅前広場を実現することができた。今では市民参加のプロセスは当たり前になった感があるが、ステークホルダーや、関係者が共有できるビジョンを持てるかどうかプロジェクトの成否を決める。先ほども述べたように、空間に翻訳できる能力を持った建築家が、具体的なビジョンを可視化し、多くの人々の賛同を得て、共有化し、実現への道を開くことは極めて重要である。今までは、ともするとブラックボックスの中で物事が決まっていって公共工事が多かったが、これからの時代は透明性のあるプロセスで、物事の賛否が問われ、具体的な公共空間が実現されることがますます求められるであろう。そのことを教えていただいた4名



の師匠には感謝するばかりである。

姫路駅前サンクンガーデン

建築は人生



井口 哲一のりかず

このたび「温故知新」の原稿執筆依頼を受け、10年前、独立に向け、勤めていた事務所を退社する際に師匠からいただいた言葉を改めて思い出しました。それは「建築家には3つのタイプがいる。一つ目は“用”の建築家。言われたことをするタイプ。二つ目は“筋”の建築家。自分のスタイルを通すタイプ。そして三つ目は“愛”の建築家。“愛”の建築家を目指さない」というもの。“愛”については具体的には述べられず、きっと「自分自身で考えなさい」ということだと受けとめました。

さて、“愛”の建築家とは。捉え方はさまざまあると思いますが、今、私の中にある1つの答えは、「いかに自分事になれるか」です。目の前のクライアントに対してはもちろん、地域や社会に対しても「どうしたら良くなるか」「自分なら」などと、いかに本気で相手の立場になれるかではないかと思っています。はたして、自分はそこに到達できているのか。いや、きっとゴールはないのではないのでしょうか。常に自問自答しながら、方向修正しながら活動していくことなのでしょう。そう考えると建築は人生そのものだとも思えてきます。考えたことや想いがカタチになる建築。条件が同じであっても、考え方や想いの方向によってカタチが異なる。ときに怖くなることもありますが、多くのワクワクする場面に出会えているのは幸運です。これから先もさまざまなことが待ち構えているとは思いますが、自他共に「愛”の建築家」と認められるよう、精進を重ねていこうと思います。



新潟市・Wさんの家（リノベーション）

意匠と設備



堀池 瞬

建築の設計・監理の仕事をしています。規模や用途もさまざまな建築に向き合ってきました。つかめないものをつかもうと反芻しながら、仕事に取り組んでいます。いま、もし建築の設計における自身の専門分野を質問されたなら、“意匠”と“設備”と答えます。語弊を生むような言い方にはなりますが、このふたつの言葉を、あえて“デザイン”と“エンジニアリング”と抽象化して言い換えてみます。デザインとエンジニアリング、この双軸を並行して深く潜らせたその先に建築の姿を浮かべようと試みる作法が、自身をかたどっているのではないかと考えています。シンプルな表現を強ければ、デザインとエンジニアリングを高度に融合させる、それが自身のテーマのひとつと言えらると思います。建築が立ち向かう自然科学に対し、単なる定性的なイメージや希望的な観測を越えて、定量的な分析と論理的な考察を重点とする意識が、自身にこのテーマを宿らせているのかもしれない。このような考えを少なからず持っていることから、建築主からの依頼の他に、設計事務所から設備設計やそれに付随する省エネルギー計画・環境配慮計画を依頼されることもあり、設計事務所のそれぞれの思いに触れて新たな視点をいただけることにも嬉しく感じています。

このたびJIAに入会し、皆様の思いや作品などからいただくたくさんの学びが背中を押してくださり、これからも少しずつ前に進んでいけるものと信じています。



小杉陣屋町の住居
(撮影：西川公朗)

交流委員会

2021年JIA交流委員会活動方針

—設計者に向けたオンライン技術セミナーを開催—

交流委員会委員長
相野谷誠志

2020年度が終わり、新しい年度となりました(この原稿を作成している時は、まだ4月です)。交流委員会の活動もコロナの影響で大きく変わり、今まで当たり前だった対面での会合や親睦を図る交流も行えないこととなり、正会員(設計者)と法人・個人協力会員(企業)の交流の場が失われることになりました。この記事が発刊される頃は、そのような状況がなくなり、今までのように人と人の交流が元のように行える環境になることを祈っていますが、現在の状況ではまだ今とそれほど変わらない状況が続いていることも考えられます。

オンライン技術セミナーを企画

そのような難しい環境の中で、どのような交流の方法があるかを考えていた時に、委員より、メーカー(資材等製造者)が設計者向けにWebを使った製品説明を行っているという情報が入ってきました。そこで、JIA関東甲信越支部交流委員会でも、法人・個人協力会員が正会員に向けて伝えたい設計実務に役立つ情報(製品開発技術等)を発信する、「オンライン技術セミナー」を行う案が出てきました。

ちょうどそのタイミングでJIA事務局宛てに、この後紹介するLIXILの営業担当者より、「JIA正会員に向けて製品紹介を行いたい」という話がありました。7月初旬、早速その担当者と交流委員会代表(私と河野委員、事務局大西さん)で打ち合わせを行い、セミナー実施に向けて企画を進めていくことになりました。

当時はまだオンラインの会議等もあまり行っていなかったもので、正直なところセミナーを実施するために何をどうすればよいのかも全くわからず、配信方法から検討しなければなりませんでした。そのため、セミナー実施までに3ヵ月以上の時間がかかり、正会員に向けた広報についても、交流委員会の中だけでなく、他の委員の方(特に広報委員会)にご協力をいただき、何とか第1回目を実現できたのは10月末でした。

第1回オンライン技術セミナー
「浴室設計への提案」

講演者：株式会社LIXIL 新規事業推進部 浅野夏生氏
開催日：2020年10月27日(火)
参加対象者：JIA会員
参加費：無料

第1回目のオンライン技術セミナーのため、主催者(私)の不慣れから、いろいろ不具合もありましたが、LIXIL講演者の方が動画等を使用して製品をわかりやすく紹介くださり、助けられました。

また、製品紹介の前段として、どうしてオンラインを使った製品販売という方法を取っているのか説明があり、現在のコロナ禍による影響だけではなく、購買者の製品への意識や、製品を購入するまでの効率化等についてお話しくださったのが非常によかったです。

その後、このセミナー開催後に紹介した製品の注文があったという嬉しい情報もいただきました。(セミナーとの関連性は不明)

「ARC-X」
浴室に使用する洗面器・水栓器具・バスタブ等を取り揃えたセレクトショップ。

オンライン発信の有効性を実感、企画継続を決定

第1回目のセミナーは、「浴室設計への提案」(講演：LIXIL)をテーマに開催しました。私やお願いしたメーカーの営業担当の方もオンラインのセミナーの配信に不安があり、2人で同じ場所(当社の会議室)から配信を行い、何とか実現できたというのが正直な感想でした。

実際にセミナーを行ってみると、参加して下さった正会員(設計者)の方から内容について積極的に質疑等がありました。コロナ禍で仕方なく行ったオンラインセミナーだと思っておりましたが、関東から遠い地域から参加いただいた方もあり、この方法での情報発信は、発信

第2回オンライン技術セミナー 「壁紙の防火性能とさまざまな機能性の紹介」

講演者：リリカラ株式会社 マーケティング本部 企画課
開催日：2021年2月26日（金）
参加対象者：JIA会員
参加費：無料

製品紹介の前に、内装仕上げ材の建築法規（建築基準法・消防法）に基づく規定について話があり、その規定に基づいた製品品質規格やカタログ表記等に反映された日本壁紙協会基準をわかりやすく説明していただきました。
セミナーの題材である壁紙の多岐にわたる機能性についても、認定基準、構造、効果、製造方法など、いろいろな視点から教えてくださり、非常にわかりやすい内容でした。
実際の設計において、材料を適材適所に採用するための情報を発信するセミナーとなることを目的としていたため、大変有意義なセミナーとなりました。



セミナーでは、機能性壁紙の新商品を紹介。
写真は、ウイルスを不活性化し、抗菌性に優れた「抗ウイルス壁紙」の施工例。

する側（法人・個人協力会員）と情報を受ける側（設計者）の両方にとって、大変有意義なものだと感じました。

よって、試験的に行った「第1回オンライン技術セミナー」でしたが、講演していただいたLIXIL担当者の方たちの素晴らしい情報発信（説明用資料・製品紹介用動画等）のおかげもあり、この企画を継続的に行う方針で進めていくことになりました。

さて、実はここからがまた苦労していくことになりました。セミナーの開催に際し、その広報や募集方法（参加者の登録方法等）に対して素人である私を含めた交流委員会メンバーでは検討がなかなか先に進まず、次の開催までの時間がまた過ぎていくことになりました。

それでも、再度また委員の方たちの協力のもと、2月末と3月初めに、第2回・第3回のセミナーを開催することができました。

セミナー開催周知に努める

第2回セミナー「壁紙の防火性能とさまざまな機能性の紹介」（講演：リリカラ）、第3回セミナー「現場の問題を解決します ダイソン独自技術のハンドドライヤーと照明」（講演：ダイソン）も第1回と同様にセミナー参加

第3回オンライン技術セミナー 「現場の問題を解決します ダイソン独自技術のハンドドライヤーと照明」

講演者：ダイソン株式会社 プロフェッショナル部（法人営業部）
開催日：2021年3月3日（水）
参加対象者：JIA会員
参加費：無料

大変興味深かったのは、日本ではコロナ対策としてハンドドライヤーの公共施設での使用は禁止していますが、実は世界的には日本のような対応をとっている国は少なく、むしろ積極的に使用する方針だということです。今回紹介して下さった製品は、感染対策として、手洗い後の手指乾燥を一体化した製品で、動画や写真を使ってわかりやすく説明していただきました。

また、セミナー参加者から「どうしてダイソン製品はデザイン性が優れているのか。専属のデザイナーが存在するのか」との質問に、実はトップ（社長や部門長）の方針がデザイン性も重視した製品づくりであること、そして、専属のデザイナー等は存在せず、全てスタッフの協議により製品の形等が決められているということがわかり、大変興味深い話が聞けました。



「dyson airblade
ハンドドライヤー」
最大14秒で乾燥。
HEPAフィルター
を搭載し、衛
生的な空気で手
を乾かせる

「Dyson Lighting」
強力で長寿命、1日の中で行われるさまざまなタスクに対応できる照明

者との質疑等による情報提供も行い、大変有意義なセミナーになったと感じています。

今の最大の課題は、このような正会員（設計者）にとって有意義なセミナーを行っていることをいかに周知させ、より数多くの設計を行っている方や、これから設計を仕事にすることを目指している学生の方たちにも、今後のセミナーへの参加を促していければと考えています。

今後もより良いセミナー開催と参加者の応募方法等を検討して進めていきたいと思っておりますので、支部ホームページのイベント情報やメルマガによる情報配信をご確認いただき、ぜひ参加していただきたいと思っております。

■「オンライン技術セミナー」情報

5月、6月は以下のセミナーを実施しました（※発刊時には開催済み）。

第4回「建物緑化が建物にもたらす影響」／大日化成(株)

第5回「設計者のためのOAフロアの実務知識」／共同カイテック(株)

第6回「公共用蓄電システムの動向について」／(株)GSユアサ

第7回「環境機能材としての透水性舗装材について」／(株)フッコー

今後も継続していきますので、ぜひご参加ください。

カンを集めて臨機応変に



榎本雅夫

2つの近作の始まり方を記す

千葉市に立つ地元企業の本社屋は、当事務所のHPを見ての連絡から始まった。いわゆる簡易プロポーザルに準じた委託方式が取られたが、初回のプレゼンで終わることなく数回の質疑応答と修正の機会がくれたことにより、受託時点では相互の距離は十分縮まっていた。既存のイメージを刷新し、隣接するJR高架線に沿って企業アイデンティティに響くファサードを提案した。

南房総の沿岸地域に建つ警察署は、強風雨や省エネをはじめとする環境的な提案としてFRPルーバーの外皮を纏う。ラーメン構造のフレーミングで構成される一般形と対照的な、面的なボリュームの組み合わせが特徴である。コンペならともかく公募入札方式の場合、従前がないことや意外性のあるデザインに対して発注側は慎重だが、合意に向けた多くのサジェッションが教授され実現した。

この2例に共通するのは、提案を受容する機運が醸成された中で、クライアントとの共同によりスムーズなラウンデブーと軌道修正ができたことである。

JIAは総じてプロポーザル選定方式に賛成と理解しているが、限られた情報しかない中で一度限りかつ15分程度のプレゼン、その他さまざまな制約に縛られた中でこのコンタクトが提案者にとってベストなのか、さらに記せば、実績条件、審査側のスキル、設計額の提示要求な

ども再考されるべきと思う。また、本来建築家は構想から設計、監理、竣工後のメンテまで一貫的に携わるべきと信じているのだが、それらが複数者に分割発注されるケースも疑問である。

国語力

祖父も父も私には寡黙な建築家に映った。子どもの頃、三船敏郎の「男は黙って…」というビールの大ヒットCMを見て、将来このような職人気質の建築家が望ましいのだろうとイメージしていた。今でもそう思う半面、特にプロポーザル方式が始まってからは「雄弁だったら…」という経験を重ねるたび心苦しくなる。せめて気持ちと体裁を整えて言いたいことを端的にまとめるようにしているが、右往左往しているうち、プレゼンに限らずさまざまな場面でキーワードをつなぐ文脈にこだわるようになった。箇条書きやダイアグラムでは曖昧になりがちな隙間についてである。基本方針、デザイン、エンジニアリング面など、設計全般の整合をストーリーだて、それを設計の過程で時折見直すことで作品と自分に対する自問自答の機会にしている。

カン…感・観・勘

設計の始まり方を記すよう依頼されたが、「方」と呼べるような流儀がないとPCの前で焦った。あればもっと論理的、効率的に仕事が進む気がするが、「方」より「カン」、感性のカン、価値観のカン、第六感・勘もカン。それらカンを働かせて相手次第、よく言えば臨機応変に対応するというのが私の始まり方なのかもしれない。建築家というのは自己主張が強く融通が利かれないと思われがちで、この辺りはクライアントに対する安心材料になるようである。

直面する仕事を置き去りにして旅する年一度の海外は、カンを集めるアンテナになっていることを願う。各地の代表的な建築も良いが、旅の途中で何気なく出会うデザインを自分の設計と重ねれば、今後のためのウォーミングアップとしても面白い。しばらく海外渡航は難しいが、コロナ禍で距離や時間の概念が変わっている。Webや本と自分なりのカンを働かせて、仕事の合間にでもバーチャルトリップに出かけるという選択肢が増えた。



千葉海運産業新社屋
隣接するJR高架線を意識した開口とスカイラインの変化



勝浦警察署
ファサード全体を覆うFRPグレーチング

「建築の両義性」への眼差し



古澤大輔

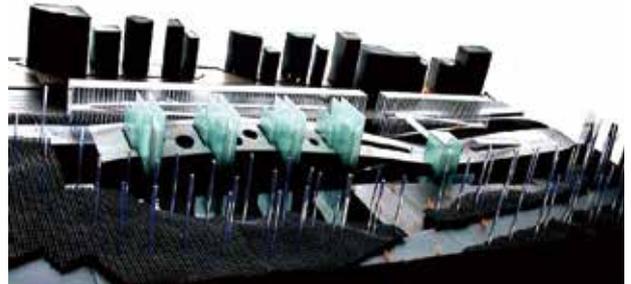
2000年東京都立大学卒業／2002年東京都立大学大学院修了

学生時代の思い出

学部生のころアルバイトをした設計事務所では、1つのプロジェクトの基本・実施・現場それぞれの段階の模型作業を担当させてもらいました。現場段階では、職人さんへ作業の説明をするためのディテール模型や、音響実験用の巨大模型などを現場事務所で作りました。自分が机の上で組み立てているのは白いスチレンボードの抽象的な模型だけど、窓の外に目をやると、そこには重機が砂埃を立てながら土を掘り返し、職人が汗を垂らしながらコンクリートを流し込み、溶接工が火花を散らしながら鉄骨を組み上げていく風景が広がっている。職人さんたちが現場事務所に入って来た時の汗の強烈な臭いや、現場の騒音を、今でも鮮明に覚えています。大学では難解な建築論の書物に触れ、現場では日々作業にあたっている人たちに触れる。この徹底的に抽象的で、そして徹底的に具象的という「建築の両義性」に、当時の私は困惑し、そして完全にやられてしまいました。この建築という両義的な存在は何なのか、もっと知りたいと強く思ったのです。

卒業設計のテーマ

当時私が所属していた東京都立大学では、4年生の12月までに卒業論文を書き上げ、残りのわずか2ヵ月間で卒業設計に取り組むというスケジュールでした。当時、動線空間に興味を持っていた私は、建築のシーケンスを研究テーマに決め、動線計画が明確なビルディングタイプである葬祭場を題材として卒業論文を書き上げました。そして卒業設計では、論文で得られた知見を活かし、火葬場の設計に取り組みました。敷地は明治神宮の森と原宿の街が接し合う境界面に設定し、火葬場と原宿の駅舎を複合させました。火葬場と駅舎という、ともに動線計画が明確なビルディングタイプを重ね合わせ、静と動／森と街／聖と俗といった相反する事項を拮抗させ、両義的な状態を創り出そうとしたのです(写真)。2つあるガラスヴォリュームのうち、左側に配されたスロープは4基の火葬炉へのアプローチ動線です。遺族たちは原宿の街を眺めながら、野辺送りをするように火葬炉へとアクセスします。一方、右側のスロープは駅舎の動線となっており、



卒業設計の模型写真。火葬場と原宿駅舎を複合させた計画

S字に湾曲した駅前広場が明治神宮の森に接続します。

修士設計のテーマ

こうした「建築の両義性」への眼差しは修士設計にも引き継がれます。修士設計で取り上げたテーマはコンバージョンです。当時、この語彙はまだ知られておらず、リノベーションすら一般的ではありませんでした。私は、建築が再生される時の、既存と新規の状態が同居する両義的な状態に興味を持ちました。対象とした既存建物は、アノニマスなロードサイド施設です。東京都立大学が位置する多摩ニュータウンのロードサイドの約6kmの区間を、自動車の視点からシーケンス分析を行い、ファミレスやガソリンスタンド、家電量販店などを公共施設へ再生する提案を行いました。既存と新規／民間と公共／人と車といった両義項が重なり合う建築をめざしたのです。

両義的な建築をめざして

卒業設計と修士設計がともに学内の最優秀賞に選ばれた私は、建築家になることを決意し、大学院を修了した2002年にすぐに自分の事務所を設立しました。そして、まだ実績のなかった私は、「カムフラージュ・アイデンティティ」、つまり匿名的な個性という両義的矛盾に孕んだ標語を、自分の活動マニフェストとして掲げたのでした。また、建築の再生への興味は、「転用」という建築的手法に移っていきました。既存の形態が存在するための根拠が漂白され、根拠と無根拠が同時存在する転用的な状態が、建築の両義性を解明するヒントになると考えたからです。そして、この眼差しは、私の博士学位論文や2019年度JIA日本建築大賞を受賞した「古澤邸」へと繋がっていきました。こうして今もなお、両義的な建築をめざして設計活動を行っています。

次世代のタマゴたち



連載スタートにあたって

JIA 学生会員 長谷川理奈
日本大学理工学部建築学科4年

こんにちは、JIA 学生会員の長谷川理奈です。

今年度から、「次世代のタマゴたち」という、現在の建築学生が発言する機会となる場をいただきました。

皆さんは今の学生の考えていることや活動などを知っていますか？ここでは、学生が今考えていること、行動していること、研究テーマなどについて、JIA 学生会員を中心に紹介していきたいと思います。

近年の建築学生はかなり恵まれており、建築を通じたインカレサークル(大学名関係のないサークル)での活動が活発であったり、コロナ禍において建築の捉え方が変化したりと、たくさんの考える機会をもらっています。

私自身も、自ら設計し、施工することをコンセプトとしているリノベーションサークル「DaBo」という団体に所属しており、さまざまなプロジェクトを通じて、その現場でしかわからないような学びの機会を数多く経験しています。

このような学生の活動や、学生が感じたこと、考えたこと



リノベーションサークル「DaBo」で改修している箱根湯本のアパート「洲(Dipa)」。左が改修初期、右が現在。2018年春から週末に集まって施工を進めています。

などを発信することが、皆さんが学生に興味を持ってくださる機会となり、あわよくば何らかのかたちで学生にお力添えいただけるような繋がりとなれば素敵だなと考えています。

また、JIAの学生会員が増えつつある傾向から、ただ今JIA 学生部会の発足を検討中です。学生会員の横の繋がりやJIA を通じた縦の繋がりにより、学生の活動をもっと豊かなものにしてほしいなど、そのような「建築を楽しめる場」をつくりたいと考えています。現在は6人程度の学生会員のメンバーと、今後学生部会が発足したらどう盛り上げていかを試行錯誤中です。学生部会がつけられた暁には、この場をお借りし、その活動報告もできたらいいと考えています。

この記事が、皆様「大人」の方々と、未熟ながら大人の世界と繋がりたい「学生」との間を取り持つ、小さなきっかけとなることができれば幸いです。



コロナ禍での卒制を経て

JIA 学生会員 植木 萌
千葉大学大学院 修士1年

私はJIA学生部会の立ち上げの検討にあたり、初めてJIAの存在を知りました。自分が日々の生活の中で心に浮かべたことをこうして文章にしているいろいろな方に見ただけに際し、改めてこのご縁に感謝しながら筆を執らせていただきます。

さて、私は千葉大学で建築を学ぶ学生です。この春学部を卒業し、大学院に進学しました。今は鈴木弘樹先生の研究室で庭園の研究をしています。自分にとって最近でいちばん大きなイベントだった卒業制作中に考えていたことをここで少しお話ししたいと思います。そしてあわよくば、さまざまな意見をいただけたら良いなと考えています。

Covid-19の大流行は私たちの生活はもとより、卒業制作のあり方も大きく変えました。作業のため引きこもっていた最中でも、世界が変わっていく雰囲気とそれに対する危機感を感じていました。そして、学生のうちにこの流れを乗り越え感覚と、立ち向かうための武器を持たなくてはならないと考えていました。そのためには、建築のスペシャリストにな



“都会の商店街に竹林を取り戻す”というコンセプトのもと卒業制作に取り組んだ

ることはもちろん、他の分野の知識も使いこなせる必要があります。そうでないと目まぐるしく変わりゆくこの世界で、新しいものはつくれません。私たちは建築を語るための言語と他の分野を語るための言語を習得して、それを巧みに使いこなしてひとつの「何か」を語ることを特に求められる世代なのだと思います。同時に、このような価値観が大きく変わりそうな局面だからこそ、変えようの無い建築や空間そのものの価値を考える機会にも恵まれた気がしています。

そうは言いながらも、そのように考えたことは私の卒制には反映できず、結局「なんだかどこかで見たことがあるようなもの」をつくってしまいました。周りからの評価はともかく、世界も、そこで必要とされる建築のあり方も変わっていくとわかっているのに、知識も思考力も追いつかない自分の力不足が非常に残念で仕方ありません。このモヤモヤした焦りに似た感情は恐らくこの先も残るのでしょう。いつか払拭できるよう、今はせめてもっといろいろなことを学んでいけたらと思います。

退任の挨拶

愛着の持てるモノとしての
会報づくりに参加しませんか？

2020年度『Bulletin』編集長
会田友朗



私の1年間の(本業に加えての)編集長生活は実質的に、2020夏号の企画準備に入る頃、コロナ禍とともに始まりました(皆さん、季刊の『Bulletin』各号の準備には約半年かけています!笑)。インタビューや特集シンポジウムのオンライン化等、さまざまな試行錯誤が続きましたが、その間アトリエの机は函面よりむしろ校正原稿や表紙案などが目立つ状態、にわか編集デスクの様相を呈し、周囲にはさぞ訝しがられていたことでしょう。

それにしても、企画編集した内容が紙に印刷され冊子という具象物として残るとするのは醍醐味です。個人的には年間4号のどれも愛おしく感じ、触れていると割いてきた時間と労力が報われていくようです。毎月の編集ワーキングにおいて、ときに印刷の微妙な色のノリについて議論したり、紙の厚さと手触りを考えたり、冊子のモノとしての一面を感じます。

最後に、当然ながら誌面はご寄稿いただいた執筆者の方々をはじめ、関係の皆様全員による協働の成果です。このような貴重な機会をいただいたことにあらためて感謝申し上げます。普段聞けない方の話を聞ける取材の役得もそうですが、編集ワーキングはそんな愛着の持てるモノづくり現場です。ピンと来た方はぜひ支部広報委員会の扉をたたいてください。特に若手会員の皆さま。すべてが電子化されてしまう(とは限りませんが)その前に……

〈アイダアトリエ〉

新任の挨拶

ひとつの建築をつくるように

2021年度『Bulletin』編集長
関本竜太



このたび、会田編集長の後を引き継ぎ2021年度の『Bulletin』編集長を務めさせていただくことになりました関本竜太と申します。JIAへの入会から早12年もの時が流れたことになりましたが、その過半の時期はなかば幽霊部員のようなもので、定期的に送られてくる支部発行の『Bulletin』と、本部発行の『JIA MAGAZIN』との違いすらもよくわかっていませんでした。

一昨年より支部広報委員として『Bulletin』編集WGに加わり、昨年度からは会田編集長の下で副編集長として編集に関わってまいりました。その中で気づかされたこととしては、設計と編集という作業は極めて親和性が高いということです。

我々は設計において単にクライアントからの要望を織り込むだけでなく、そこに社会のあるべき姿のようなもの(理想像や願望)を投影しています。これは編集も全く同じで、単に執筆者の原稿を掲載するのみならず、これからの社会に対する思いや願望をわかりやすく読者に伝えるというミッションは、建築の思考そのものともいえるかもしれません。

この『Bulletin』という伝統ある会報誌の誌面を任されるにあたり、建築家として、ひとつの建築をつくりあげる気持ちでその編集に向き合いたいと考えています。どうか皆さまの忌憚のないご批評をお寄せいただけましたら幸いです。

〈リオタデザイン〉

暑い夏の楽しみ方

- とびきり暑い日にどこにも出かけず、エアコンの効いた部屋で音楽を聴いたり映画を見たり……想像しただけでも至福の時間です!(関本)
- 今までは汗をかきながらビールを飲むのが最高でしたが、猫がやってきて初めての夏は、エアコンの部屋でマツタリするつもりです。(中澤)
- 野球にゴルフ、真っ黒に日焼けした後のキンキンに冷えたビール、夏はこれです!!(知見)
- 今年の夏はいろいろ山積みのコトを整理し、前も後ろも見通しがきくようにしたい。(吉田)
- 毎年の夏の楽しみと言えば、ある珈琲屋さんがつくるアイスコーヒー。夏前に予約したものが暑い夏に届く。今年の夏も楽しみです。(青木)

編集後記

- 今年の夏は、長く、暑くなりそうな予感。家族とキャンプで、自然の中でまったりと過ごしたい。(望月)
- 夏の暑さを耐えた後のアイスは格別。季節関係なくコンビニで新作をチェックしていますが、今年も素敵な新作に出会えますように!(長谷川)
- このところの夏と言えば、子どもと近所の公園の水遊び場を制覇したり、田んぼの脇で一緒に遊んだり、童心に帰る機会が増えてます!(会田)
- 今年の暑い夏は、東京オリンピックにボランティアで参加する大学生の娘と共に寝不足となりそうです。(市村)

編集 : 公益社団法人 日本建築家協会
関東甲信越支部 広報委員会
委員長 : 市村宏文
副委員長 : 中澤克秀
委員 : 会田友朗・吉田 満・望月厚司・関本竜太・長谷川理奈
編集長 : 関本竜太
副編集長 : 望月厚司・会田友朗
編集ワーキングメンバー : 広報委員+長澤 徹・有泉絵美・青木律典・知見徹摩・井筒悠斗・立石博巳
編集・制作 : 南風舎

Bulletin 288 2021 夏号
発行日 : 令和3年6月15日
発行人 : 大西摩弥
発行所 : 公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 2-3-18 JIA館
Tel : 03-3408-8291(代) Fax : 03-3408-8294
印刷 : 株式会社 協進印刷

■ JIA 関東甲信越支部関連サイト一覧
・(公社)日本建築家協会(JIA) <http://www.jia.or.jp/>
・JIA 関東甲信越支部 <https://www.jia-kanto.org/>

■ 定価 300円+税/会員の購読料は会費に含まれています。

©公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部 2021

ガレージシャッター

雨戸シャッター

管理シャッター

防災シャッター

特殊シャッター

門扉

様々なお客様の満足を
オーダーメイドでカタチにする、
横に引くシャッターの
専門メーカーです。



お問い合わせは…

株式会社 **横引シャッター**

〒120-0005 東京都足立区綾瀬6-31-5

03-3628-4500

<https://www.yokobiki-shutter.co.jp/>